地質学雑誌　第107巻　第2号（通巻1265号）付録　昭和27年6月10日第三種郵便物認可　平成13年2月15日発行（毎月1回15日発行）

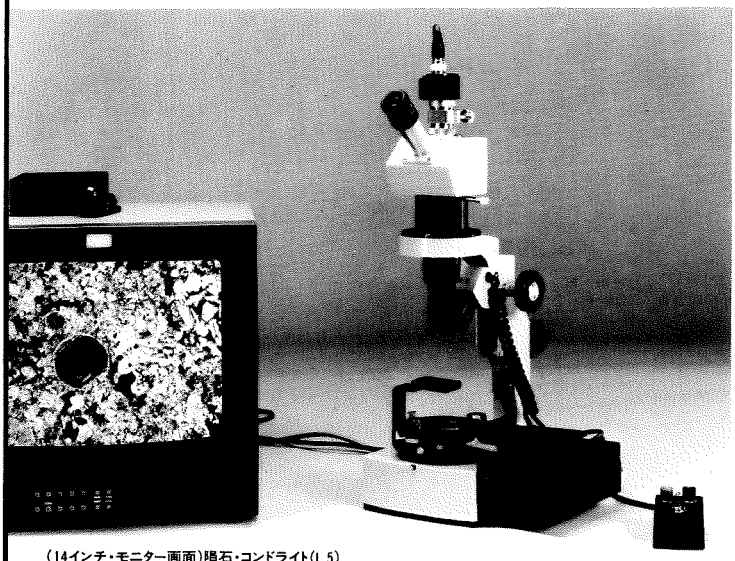
# 日本地質学会 News

Vol.4 No.2 February 2001

# 鮮明な映像・ポラビジョン ビデオシステム

**特長**

- テレビで偏光顕微鏡観察が大勢で一度に見られます。
- リモコンによりステージの回転及びオープン・クロスポーラーの観察がスイッチ1つで行えます。
- 高性能CCDカラーカメラにより高画質で色彩はあざやかです。
- ズーム式で(30倍～200倍)変倍が容易です。
- ビデオプリンターと接続して、その場で写真が撮れます。
- パソコンと接続して画像解析・計測ができます。(画像解析用ソフト別売)



(14インチ・モニター画面)隕石・コンドライト(L5)

**営業品目**

- 岩石薄片の受託加工
  EPMA用研磨薄片・研磨片・軟弱粘土岩・ブルーレジン圧入薄片・難資料歓迎します。
- オートマチックポイントカウンター
- 偏光投影機(ポラビジョン)
- 偏光実体顕微鏡(ポラステレオ)
- 簡易偏光顕微鏡(ポラスター)
- 教育用岩石薄片
- 隕石標本 各種

製造・販売

**有限会社北辰光器製作所**

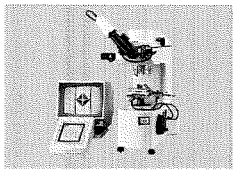
本社・工場 〒168-0082 東京都杉並区久我山3-29-27
電話・ファックス 03(3334)7959
E-mail：hokushin@pop21.odn.ne.jp

Akashi

## 試験・計測機器の総合メーカー・・・アカシ

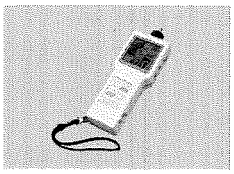
**硬さ試験機、振動計測機器、振動試験機、釣合い試験機、地震観測機器**の豊富なバリエーションとラインナップで常に最先端をゆくニーズにお応えいたします。

**硬さ試験機**



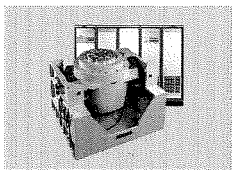
- 硬さ試験機標準試験機
- 自動微小硬さ試験システム／自動ビッカース硬さ試験システム
- 微小硬さ試験機
- ビッカース硬さ試験機
- 微小表面材料特性評価システム
- ロックウェル硬さ試験機
- ポータブル硬度計他

**振動計測機器**



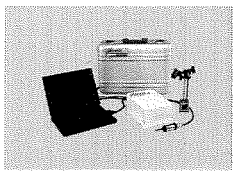
- ハンディ・バイブロメータ
- グランドノイズメータ
- ユニバーサル振動計
- 振動監視装置
- 各種振動ピックアップ他

**振動試験機**



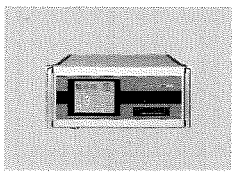
- 小形動電式振動試験機
- 中形動電式振動試験機
- 大形動電式振動試験機
- 電気油圧式振動試験機
- 振動制御装置
- 多軸振動検査システム他

**釣合い試験機**



- フィールドバランサ
- 横形釣合い試験機
- たて形釣合い試験機
- 横形専用機
- たて形専用機
- 全自動釣合い試験機他

**地震観測機器**



- 二次災害防止機器
- 地震・噴火観測機器
- 地震計測機器
- システム・ネットワーク観測網他

ホームページ http://www.akashi-grp.co.jp

**株式会社アカシ** 〒224-0053：横浜市都筑区池辺町3286 Tel.(045)932-6138 Fax.(045)932-5688
大阪Tel.(06)6612-2445 名古屋Tel.(052)732-6641 仙台Tel.(022)239-5450 岡山Tel.(086)242-0045
福岡Tel.(092)471-6141 宇都宮Tel.(028)663-5631 安城Tel.(0566)97-1887 広島Tel.(0824)27-1170

# 日本地質学会News

Vol.4 No.2 February 2001

The Geological Society of Japan *News*
日本地質学会／〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル6階
**編集委員長 高橋正樹**
電話 03-5823-1150 Fax 03-5823-1156
E-mail : geosocjp@ra2.so-net.ne.jp
ホームページ http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/gsj/


## Contents

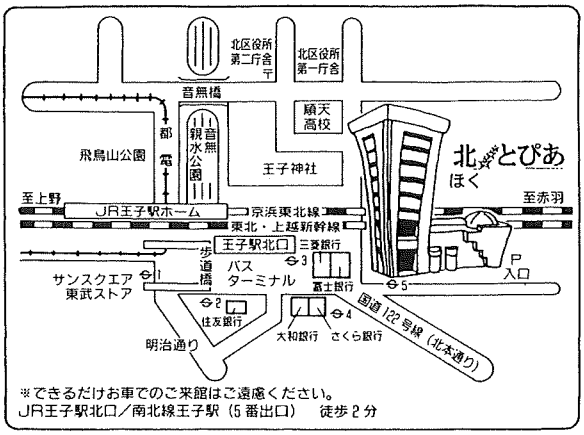

**表紙紹介** 平島崇男
**博物館紹介㊶** 美濃加茂市民ミュージアム/みのかも文化の森 可児光生……2-3
**紹介**……4-5
大木公彦：鹿児島湾の謎を追って（原田憲一）
藤井昭二：大地の記憶―富山の自然史―（大森昌衛）
**ご案内**……5
「千葉県の地質環境と環境教育」の第2回談話会が開かれる 会田信行
**公募**……6
北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻助教授（講師）の公募
**報告**……6-8
第18期第1回地球化学・宇宙化学研究連絡委員会議事録/鉱物学研究連絡委員会（第18期・第1回）議事録
白尾元理写真展「日本列島の20億年」を富士フォトサロンにて開催……7
**カレンダー**……8
**支部コーナー**……9
北海道支部：2000年度総会・例会のご案内
近畿支部：総会・講演会のご案内
**院生コーナー**……10-11
ODP航海体験記 成瀬 元
**The Island Arcだより**……12
「第一次地質基準説明書」完成……12


## 会員の皆様

研究企画委員会公開討論会を以下の日程内容で開催します．ふるって御参加下さい．

### 21世紀を拓く 日本地質学会構築へむけて

**日 時：3月30日（金曜日）午後1時より，4時30分まで**
**会 場：北とぴあ 第1研修室**




※できるだけお車でのご来館はご遠慮ください。
JR王子駅北口／南北線王子駅（5番出口） 徒歩2分

議 事
開会あいさつ
会長：小松正幸 （5分）
基調報告：木村 学・高橋正樹 （20分）
特別講演：副会長 平 朝彦 「21世紀の科学と固体地球フロンティア」 （25分）

分科会報告：各15分
中等・初等教育分科会：（阿部）
研究機関分科会：（湯浅）
国際化分科会：（磯崎）
研究・高等教育分科会：（木村）
産業分科会：（滝田）
博物館分科会：（那須）
関連学会連係分科会：（伊藤）

討論 約1時間
まとめ 高橋正樹・木村 学

（詳細は3月号にて掲載致します）


2000年度第4回定例評議員会のお知らせ……12
**学会記事**……13-23
2000年度第3回定例評議員会議事抄録
**執行委員会だより**……24
2000年度 第13回執行委員会

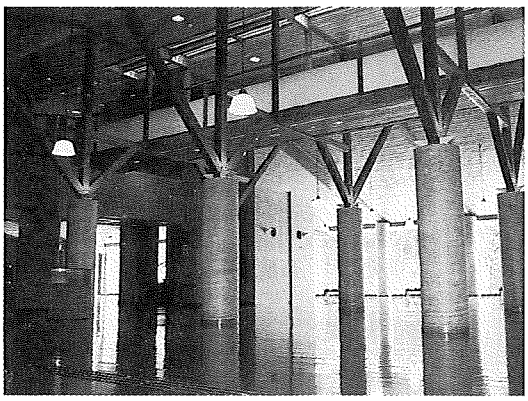

## 表紙紹介

写真・文：**平島崇男**

表紙の写真はフランス南部・イタリア国境に近いケラス（Queyras）地方の山岳風景である．この地域には，藍閃片岩相の変成作用を被った海洋地殻物質が広く露出している．海洋堆積物起源の変成岩は主として石灰質でローソン石，アルバイトなどを含み野外では白色を呈すが，変成オフィオライトには藍閃石，ローソン石，ヒスイ輝石が含まれ暗青色を呈す（Frey et al., 1999）．フランス南部の先史人類もその輝きに魅せられてか，ヒスイ輝石を用いた遺物を遺している．当地の考古学者は地質学者の協力を得て，先史人類が装飾品などに用いたヒスイ輝石の原産地を推定する研究を行っている．ヒスイ輝石を含む岩石は風化浸食に強いため，その露頭はどうしても山頂付近に多い．この写真も標高2,800m付近の変成オフィオライトの露頭を調査した後，対岸の山稜を望んだものである．この地域では1,500mを越えると植生が貧弱なので，高所から双眼鏡で周囲を眺めるだけで，目的の岩石の露頭を容易に見つけ出すことが可能である．双眼鏡＝スイス・ハンマーとは言い得て妙である．2001年9月に開催する第6回国際エクロジャイト会議では藍閃片岩相の岩石も研究トピックスの一つである．藍閃片岩相の研究者の参加も大歓迎である．


広告取扱：株式会社廣業社
〒104-0061 東京都中央区銀座8-2-9 電話 03-3571-0997 印刷・製本：創文印刷工業株式会社

美濃加茂市民ミュージアム全景



エントランスホール

# 美濃加茂市民ミュージアム/みのかも文化の森
## *Minokamo City Museum*

美濃加茂市民ミュージアム学芸員　**可児光生**

### ○美濃加茂市とその地質

美濃加茂市は，岐阜県のほぼ中央部南端に位置しています．江戸時代，中山道52番目の太田宿が置かれたほか，木曽川水運の中継地としても栄え，今も道路や鉄道が交差する交通の要衝です．地勢は，標高300～500ｍの山地が続く北部地域，200ｍ前後の丘陵が続く中部地域，70ｍ前後の河岸段丘が広がる南部地域に分かれています．市域南部と木曽川対岸の可児市北部は，周囲を山地に囲まれて低平な平野が発達し，美濃加茂盆地をつくっています．

美濃加茂盆地の基盤岩には，美濃帯中生層と花崗岩が分布します．それをおおって，新第三系や第四系が存在します．中新世の瑞浪層群は下位から蜂屋累層，中村累層，平牧累層が堆積しています．

このうち，中村累層および平牧累層からは，ゴンフォテリウム（長鼻類），キロテリウム（サイ科），アンキテリウム（ウマ科），アンフィトラグルス（シカ上科），アンキテリオミス（ビーバー科）などの哺乳動物化石を豊富に産出しています．これらの哺乳動物化石はこの時代としては日本有数の産出であり，平牧哺乳動物化石群と呼ばれています．

1993年3月，木曽川河床に分布する中村累層から哺乳動物の足跡化石が発見（17個）されました．当時，哺乳動物の足跡化石としては日本最古ということで大きな注目を浴びました．足跡の主は，奇蹄類であるキロテリウムと推定されます．また，その近くの河床から400本を越す直立樹幹化石群（化石林）が発見されました．地層面が広く露出する部分で広範囲な分布が確認され，これは日本最大規模のものです．

### ○美濃加茂市民ミュージアム

美濃加茂市民ミュージアムは，この地域の自然史，人文，美術をその分野とする「地域博物館」で，一部教育センターを併設する教育複合施設となっています．2000年（平成12）10月にオープンいたしました．市域のほぼ中央の丘陵地に立地し，建物はコナラ，アラカシやヒノキなどの森に囲まれています．建物を含め敷地の9ヘクタールの森を「みのかも文化の森」と呼んでいます．

森は，体験の森，自然観察の森，遺跡の森，彫刻の森などのゾーンに分かれています．付帯施設である「生活体験館（まゆの家）」は，市内の養蚕の民家を復元したもので，少し不便でも知恵を生かして生活していた昭和30年代の暮らしを体験できるようになっています．民具展示館では，生活に密着して使われていた道具が展示されています．そのほか，アーティストが滞在して制作活動のできるアトリエ，市民創作活動の場である実習棟を設けています．

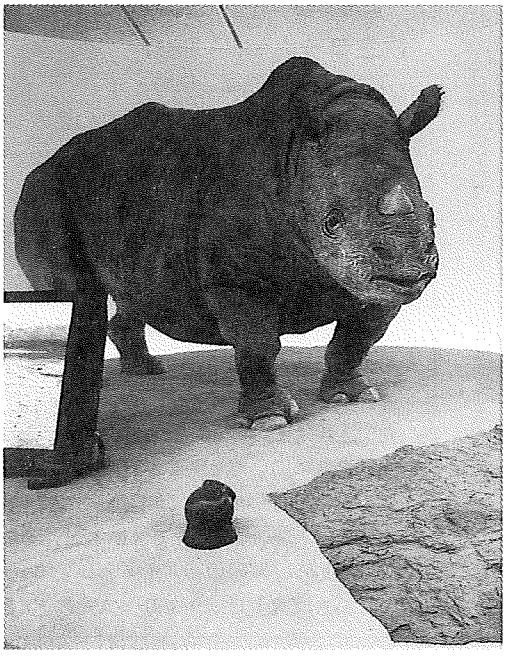
施設の整備にあたり，発掘調査が行われ，森には縄文から中世にかけての集落があったことがわかりました．そのうち，古墳時代の1軒の住居址を保存処理を施した上，公開してあります．本館の展示空間としては，常設展示室，美術工芸展示室，企画展示室，展示ホールに分かれ合計約1,030$m^2$です．収蔵スペースは，本館と別棟に4室あり，830$m^2$ほどとなっています．

常設展示室は①川と大地②川と文化③川と道④祈りの世界⑤群像みのかも，と5つのテーマを設けています．

### ○「川と大地」の展示

メイン展示は，1993年発見時に作成した哺乳動物の足跡化石のレプリカと復元したキロテリウムです．人を感知すると首と耳が動くため，一瞬驚く人も多いようです．導入部には，美濃加茂盆地周辺地域の25,000分の1の地質マップ，実物資料による地質の柱状標本を展示してあります．美濃帯のチャートや砂岩，蜂屋累層の凝灰角礫岩や安山岩，中村累層の礫岩などこの地域を代表する岩石を展示してあります．

平牧動物化石としては，キロテリウム（カニサイ），アンキテリオミスなどのビーバー，ゴンフォテリウム，淡水魚類など，この地域と周辺から産出する化石が展示し



キロテリウム（カニサイ）

てあります．広葉樹，針葉樹の植物化石の展示では，実際に触ることのできる標本もあります．

「大地の生い立ち」「発見！太古の化石」と題したコンピュータグラフィックスによる映像装置では当時の環境を知ることができます．

### ○学校教育と地域のかかわり

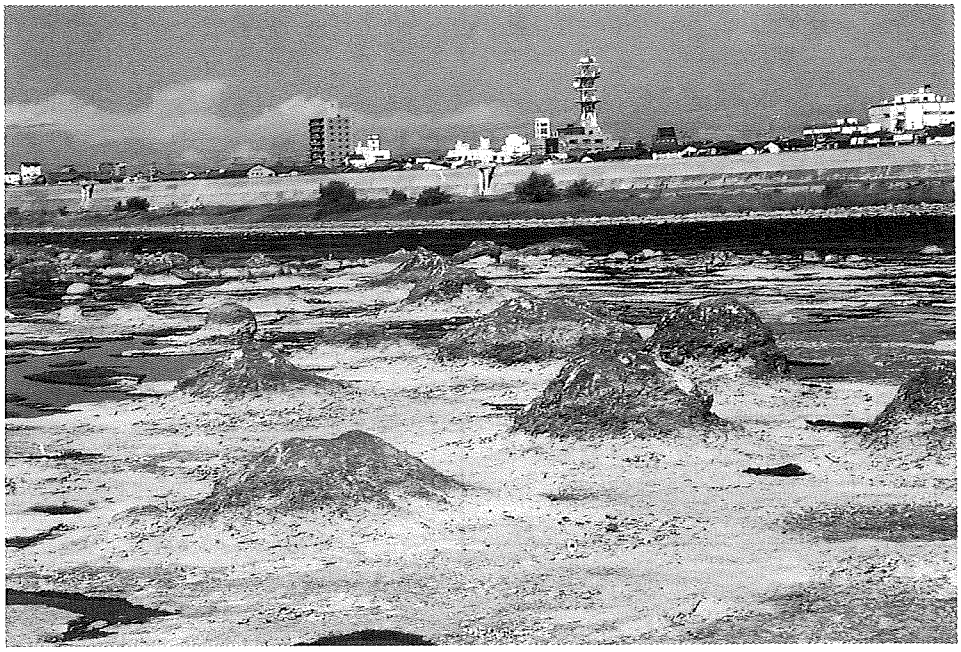
市民ミュージアムの特徴に，「森の学校」という発想に基づいた学校教育との連携があります．学校が「社会見学」といった目的で来館するだけでなく，実際にここの施設にある「もの」と「ひと」を利用しながら学習活動を繰り広げる場にしていることです．オープンする4年前から様々な学習内容を学校と学芸員で話し合い「活用の手引き」を開館までに作成しました．これが現在のミュージアムでの学習のベースになっています．ミュージアムでは，学校活用専用のバスを所有しています．市内の学校がクラス単位でほぼ毎日利用し，給食を食べて1日学習する場合もあります．

また，100名を超えるボランティアが館内で活動しています．「展示ガイド」「アート」「学習支援」「生活体験館」「伝承料理」の5つのそれぞれの分野で，来館者や児童生徒とミュージアムとの橋渡し的役割を果たしています．

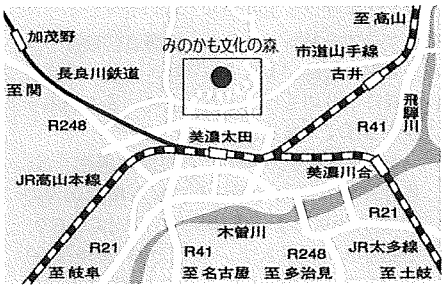
（利用案内）

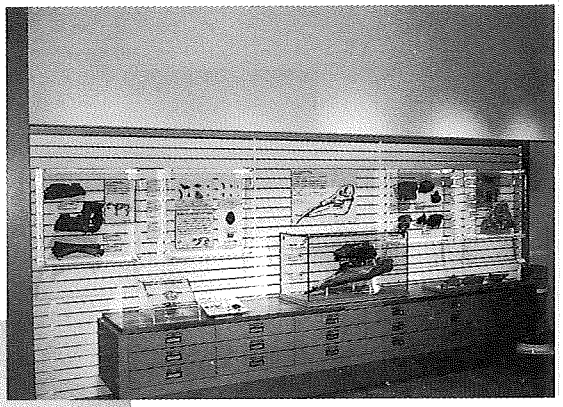
開館時間：9：00～17：00
休 館 日：月曜日，第4火曜日
（月曜日が祝日の場合は開館し，翌日休館します．）
観 覧 料：常設展示は無料（企画展示は有料）
交　　通：鉄道/JR名古屋駅から美濃太田まで特急で40分，北口より徒歩17分
車/名神高速小牧インターから35分
所 在 地：505-0004 岐阜県美濃加茂市蜂屋町上蜂屋3299-1
電話：0574-28-1110　Fax：0574-28-1104
URL：http://www.forest.minokamo.gifu.jp/

哺乳動物足跡化石



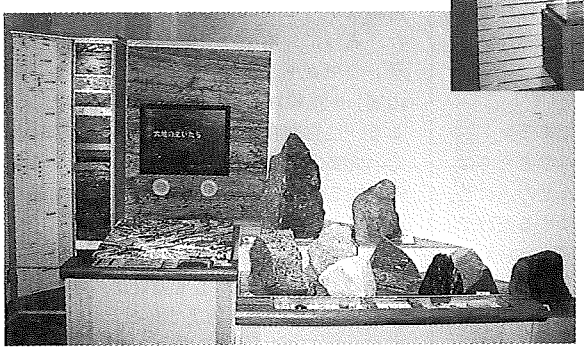
直立樹幹化石群（化石林）



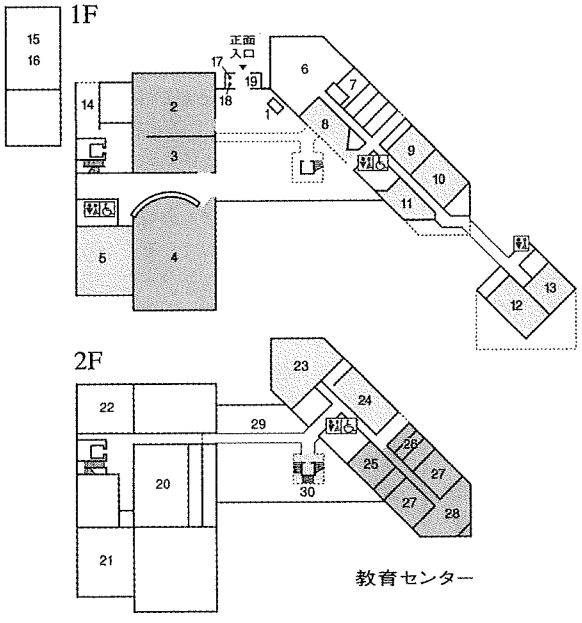
化石の展示

＊展示台をかねた引き出しの中にも化石や岩石が入っています．来館者のあそび心を誘う工夫をしています．



岩石の展示

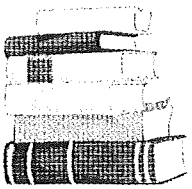
市民ミュージアム




教育センター

1F
1 総合案内
2 企画展示室・市民ギャラリー
3 美術工芸展示室
4 常設展示室
5 緑のホール
6 事務室
7 ボランティア室
8 情報コーナー
9 会議室
10 研修室
11 ティールーム
12 工芸室
13 陶芸室
14 トラックヤード
15 バス車庫
16 整理室、収蔵庫3・4
17 公衆電話
18 コインロッカー
19 かさ立て

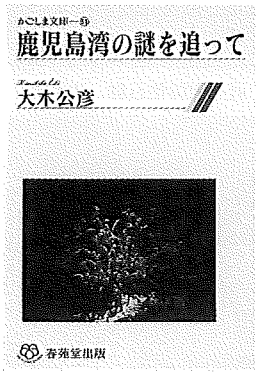
2F
20 収蔵庫1
21 収蔵庫2
22 学芸員室
23 情報学習室
24 研究室
25 教育相談事務室
26 教育相談室
27 学習室
28 プレイルーム
29 ブリッジ
30 森のタワー



## 紹　介

### 鹿児島湾の謎を追って

大木公彦




〔春苑堂出版　2000年6月20日発行，223ページ，定価1,500円＋税，ISBN4-915093-68-9〕

宇宙空間物理学のパイオニアであるシドニー・チャップマン博士は「日本の学者たちはよい論文を書くけれども，ほとんどの人に著書がない．私たちは研究を立派にするだけでは十分ではなく，自分の学問体系について，著書にして世に問うべきなのだ．これは大切な義務なのだ」と語ったそうである（桜井邦朋『大学教授』地人書館，1991年，p.105）．地学者にとって耳に痛い指摘であるが，本書は，そうした批判に真っ向から応えている．1969年に鹿児島大学を卒業後，同大学に奉職した著者は，鹿児島湾の形成史を縦糸にとり30年余にわたる研究史を横糸にして，地方大学における研究者の一つの生き方を見事に紬だしているからである．

第1章「変化に富む鹿児島湾」と第2章「海底の流れと水塊」では，主に著者が学位論文のために実施した底質の粒度分析と底棲有孔虫の群集解析に基づいて，沿岸から海底への堆積物の運搬と流入してくる黒潮の分流と底層流による再移動の様子を詳しく描きだしている．この部分を読むと，コアの採取法が理解できるし微化石の群集解析や粒度分析の意義も理解できるので，学生にとって海洋地質学的研究のよい手引となるであろう．

第3章「海底火山噴気＜たぎり＞とサツマハオリムシ」は，1973年湾奥部で水銀汚染魚が発見されたことを契機に行われた潜水海底調査の物語である．潜水調査船と無人海底探査機による熱水噴気孔の観察に続いて，ダイバーが水深200mの海底に水中エレベーターで潜水して直接噴気孔付近のコアを採取する場面の描写を読むと，読者はあたかも自分も調査に参加しているような臨場感を味わうはずである．また，中央海嶺中軸部の熱水噴出孔で発見されたハオリムシが＜たぎり＞の近くにも生息していることを知り，身近な場所に世界的な研究テーマが潜んでいることを理解するであろう．

第4章「隼人三島と天平の海底噴火」は，著者が非常勤講師を勤めることになった鹿児島短期大学で手にした卒業論文に触発されて行った，後氷期の海水面変動（特に縄文海進）と鹿児島市の地盤（沖積平野）形成史の研究成果である．隼人三島の歴史を明かすために『続日本紀』を読んだり，学生と一緒にサンゴ礁を求めて段丘調査を行ったり，あるいはコンサルタント会社からもらい受けたボーリングコアを解析したりと，謎解きに向かって一直線に行動する著者の姿は，これから卒業研究に取り組もうとする学生に大きな刺激を与えるはずである．

第5章「姶良カルデラと桜島の誕生」は，著者が卒業研究で明らかにした桜島起源の「新期火山灰および軽石層」の後日談である．1993年8月の洪水でシラス（火砕流堆積物）から火砕流で焼かれた立木が洗い出され，樹種鑑定から25,000年前の古気候が復元された．さらに，約12万年前に堆積した「城山層」のマガキと底棲有孔虫の群集から，「城山層」を堆積させた海の姿が復元されたのである．地質調査には苦労が付き物であるが，その成果は学問的な飛躍の礎になるという実例を知ることで，学生の卒業研究に取り組む意欲は大きく高まるものと期待される．

第5章「鹿児島湾誕生の謎」は，著者が1970年代に手伝った温泉調査から始まった鹿児島地溝の謎解き物語である．温泉ボーリングの地下430mの所に含まれていた大型のカキ化石の存在から鹿児島市地域の構造運動の激しさを直観した著者は，温泉ボーリングコアと地表に露出した地質を対比検討し，鹿児島地溝の存在を確認した．そして，露頭の観察（断層，貝化石，スランプ構造，岩頸等）から地溝の全貌と発達史を明らかにしていったのである．プレートテクトニクスと聞くと，フィールドワークを主体とした卒業研究とは無縁なものと考える学生は多い．だが，本章を読めば，それは大きな誤解であることを理解するであろう．そして，そこから逆に，どんな局地的なフィールドワークにも地球的な視野を忘れてはならないことに気づくはずである．

最終章「鹿児島湾の環境と将来」では，まず「地形・地質から学ぶこと」として地震と噴火にともなう地盤の液状化と海底地滑りに誘発される沿岸部の堆積環境の変化について説明している．次いで「鹿児島湾をとりまく環境」の節では，ごみ処理による地下水汚染に警告を発するだけでなく，噴火地震の被害は新しい埋め立て地域に集中する危険性も指摘している．こうした長年の地域研究に基づいて，郷土の将来を真剣に案じる大学人の存在なくしては，地方大学への信頼を高めることはできまい．著者は，大学改革で求められている大学人像の一つのモデルを示していると言えるであろう．

ところで，微化石からプレートテクトニクスまで，著者が，過去30年余，鹿児島湾の謎を解くために手掛けざるを得なかった研究分野は実に多岐にわたっている．無論，著者ひとりで全ての分野のエキスパートになれる訳はない．恩師や友人あるいは教え子などの力を借りているが，それだけではない．時には雅楽を楽しんだり，時には茶人と親交を結んだりして人の輪を広げていくことで，新しい研究の視点を見いだしたり，今までの知識をつなぎ合わせるヒントを得たりしているのである．

よく「よき研究者であるためには，よき社会人であれ」と言われる．そのためには大学外の人と広く付き合うことが不可欠である．しかし，大都市ではこれが意外に難しいのではなかろうか．著者の場合，そうした付き合いを自ら求めて積極的に実践している．人柄が先にあることは言を待たないが，鹿児島市という都市のサイズも大きな要素となっているように思われる．

国立大学の独立行政法人化が実施されれば，一部の国立大学が特権化していく陰で，大多数の地方大学では研究条件が今よりもさらに劣悪化するだろうと危惧されている．また，教官の新規採用に当たっては任期制が積極的に導入されることも予想されている．こうした状況下で地方大学にいる若手研究者は不安を抱えているであろう．また，博士課程で研鑽中の大学院生は就職の夢すら持てないで悩んでいることであろう．現在の大きな流れを正面から押し返していくことは大変難しいことである．しかし本書を読めば，地方大学にあっても，常に問題意識を持って地元の地質現象に目を向ければ，日々新鮮な気持ちで研究に勤しむことができることが理解できるし，その成果は世界にも十分に通用しうるものになりうることも理解できるはずである．

本書は，これから卒業研究に取り組もうとする学生には無論のこと，地方大学で悩んでいる若手研究者と教育職を目指している大学院生にとっても，恰好の研究ガイドとなりうるものであると考え，紹介する次第である．

（原田憲一）

### 大地の記憶
—富山の自然史—

藤井昭二著

〔桂書房　2000年2月発行，B5変型判，197ページ，定価2000円＋税，ISBN4-905564-14-X〕

先に著者は「富山湾―神秘性とロマンの『宝庫』(新興出版社，213頁，1997)」を富山県内の研究者と協力して，富山湾及びその周辺の自然や産業について，多くの写真と図を添えた解説書を編集出版している．この本は富山湾及び周辺地域の自然と産業を紹介して，末尾で「日本海博物館」の構想を提示している．

著者の富山の地質に対する執着は，四十年にわたって自分の足で富山の自然を調査した成果をもとに，改めて本書を公けにしている．著者はあとがきのなかで「四十年，昼の弁当続きたり，雪の降る日も，汗ぬぐう日も」という自製の歌で，永年の調査の苦労を追憶している．

序文のなかで，本書の執筆の目的を「県民や市民の生涯学習を手伝うため」と記し，「富山の自然の語る物語に耳を傾けよう」と読者に呼び掛けている．

本文は，「世界のなかの富山」，「水」，「富山の平野」，「丘陵と台地」，「山」，「地形と環境」，「陸と海の変遷」，「富山の地震」の八章から構成されている．

「世界のなかの富山」では，富山平野の米と麦の文化の起源を中国の長江と黄河を訪れた経験からこの地域に求め，これらの収穫に関わる梅雨前線や冬の降雪と大陸の気候の特性と大陸の地形や気候との関係を説いている．さらにナホトカ号の沈没による重油流出の特性を，日本海の海流や気象から説明している．導入の意図と着眼は理解できるが，やや舌足らずの点があるため，著者の意図について読者の理解を困難にしている点が惜しまれる．

「水」の章では，河川水，地下水，温泉，海水に分けて，それぞれに関係する地形や成因と働き，水質とその利用を解説している．また主な河川や地下水の性状から富山集水盆の水収支に触れている．さらに温泉の分類と成因を説き，県内の温泉の一覧表を上げて，海底の地形・地質にまで言及している．

「富山の平野」では洪水，地盤沈下，扇状地を解説しながら平野の成因と災害を説いている．

「丘陵と台地」は呉羽山丘陵，二上山丘陵，高岡台地，氷見市南部の台地の地質と成因を説き，台地と隆起扇状地の差異を解説している．

「山」の章は火山と地殻運動による隆起山脈の成因を解説し，飛騨山脈の形成史と乗鞍火山帯の噴出史を述べているが，とくに立山火山の将来の変化を予想し，氷河地形と周氷河地形に触れていることが注目される．

「地形と環境」では気候変動と海水準変動に触れ，魚津の埋没林や離水海岸地形と，富山湾周辺の自然貝層の年代や特長を表示している．

「陸と海の変遷」は富山湾周辺の地層の形成史をまとめ，日本海の形成史を説き，富山の大地の変遷を楡原期（2000×$10^4$BP），岩稲期（2000～1700×$10^4$BP），黒瀬谷期（1650～1600×$10^4$BP），東別所期（1600～1500×$10^4$BP），下部音川期（1500～1350×$10^4$BP），上部音川期（1350～800×$10^4$BP），阿尾期（650～350×$10^4$BP），薮田期（350～150×$10^4$BP），大桑期（150～80×$10^4$BP），埴生期（呉羽山期）（80～50×$10^4$BP），段丘時代（50～2×$10^4$BP）の11期にわけて，それぞれの時期の古地理図と主な生物を図示している．

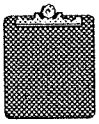
ただ上記の年代の空白について，一部には陸地化の説明はあるが，明確に解説しておいてほしかった．

最後に「富山の地震」の章を補って，過去の地震の記録や，古地震の記録や活断層を記し，地震の原因や規模および地震による被害と対策を説きながら，頻度から予知の現状を解説している点に読者に対する著者の配慮を感ずる．

全体にわたってカラーによる地質図や豊富な写真や図表が随所に上げられており，とくに各章末に多数の参考文献を補っていることは，読者の学習を助けている．そのためにも巻末に索引が補われていないことが惜しまれる．

永年第四紀の地史を専攻してきた著者だけに，各章の記述が現在の地形解説から始まっており，著者があとがきに記している「自然史の学習は現在を含む第四紀の調査から」という狙いは成功している．富山県における学校教育はもとより生涯教育にとっても，貴重な参考書となることが期待される．とくに文脈を通じて著者の富山の郷土に対する愛着心が感じられることは，本書の親しみを増している．

**（大森昌衛）**



## ご案内

本会以外の学会および研究会・委員会よりの催し物のご案内を掲載します．

## 「千葉県の地質環境と環境教育」の第2回談話会が開かれる

この談話会は，近藤精造千葉大学名誉教授の叙勲祝賀会に併せて開催された記念発表会が基になっている．先生が地学教育，環境問題などに深く関わってこられたことから，千葉県における産・学・官の有志が集まり，それぞれの立場から「千葉県の地質や環境」に関係した話題を提供してもらい，知見を広めるのが開催目的であった．

1998年3月7日（土）に第1回を開催し，その後は2年に1回開催することを決めた．昨年がその年であったが，1年遅れの本年1月13日（土）に千葉県教育会館において，第2回談話会が開催された（参加者37名）．

この種の談話会は，千葉県の地質環境に携わる様々な立場の人々の会合の場として，極めて有意義であるとの意見が多く，今後も実行委員会を組織して継続させたいと考えている．なお近藤先生は一昨年ご逝去された．

第1回，第2回の内容は，それぞれ論文集（第1巻A4判88ページ，第2巻A4判36ページ）として出版されている．論文集は環境教育を重視した内容になっているため，残部を県内公立図書館及び高等学校等の教育機関に寄贈し，活用してもらっている．

**《第1巻の内容》**

地質環境と環境教育，勝浦市鵜原の三浦層群清澄層から産出したオオバタグルミ化石について，船橋埋め立て地で採取されたカニ化石について，廃棄物処理過程の鉱物学，ダイオキシン問題の学校での対応について，魔女狩りされた環境教育―ゴミ焼却施設のダイオキシン対策をめぐって―，夷隅の地層をみてみよう，湧水の里・きみつ，佐倉市自然環境調査と「湧水ボランティア」，環境問題について，環境教育―人間と自然―，地域防災計画と地質環境，災害予測にもとづく学校の防災を考える，ジオロジカルツーリズムの楽しみと可能性について，私と地質学の出会い

**《第2巻の内容》**

黒滝層の化石シロウリガイ，白子の冬の最低気温はなぜ低くなるのか，千葉県西部地域の地下構造（中間報告），流域環境管理と分水界，Geotrail・Geotope・Geopark，どのようにして沖ノ島の自然環境を守るか！，宅地の診断を中心とした地質環境教育の例，台地をつくるローム・砂を利用した環境教育，それは学校の前の小さな露頭から始まった―小学校6年生の露頭観察に学ぶ―

次回の談話会の日程等は未定である．興味のある方には案内を差し上げますので，下記まで問い合わせください．

〒261-0005 千葉市美浜区稲毛海岸3-5-1
千葉県水質保全研究所地質環境研究室気付
「千葉県の地質環境と環境教育」実行委員会

**（会田信行）**

## 公募

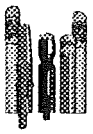
教官公募等の求人のニュース原稿につきましては，採用結果をお知らせいただけますようお願い致します．

### 北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻助教授（講師）の公募

このたび，当専攻では下記の要領で『助教授または講師』を広く募集することになりました．ふるってご応募いただくとともに，関係各位にご周知下さいますようお願い申し上げます．

記

職種・人員：地球惑星進化科学講座　助教授または講師　1名
専門分野：堆積物,堆積岩に関する有機地球化学・生物地球化学
（野外実習を担当できる方が望ましい）
着任予定時期：決定後できるだけ早い時期
応募書類：
イ）履歴書（内外の学会活動，受賞歴，参加しているプロジェクト研究歴各種研究費受領歴，学位審査履歴（主査・副査のほか実質的指導を含む）非常勤講師の経歴なども記載すること）
ロ）これまでの研究経過（2,000字程度）
ハ）研究業績目録（和文のものは和文で表記すること）
A. 査読のある原著論文
B. 査読なし論文，総説など
C. 著書
D. 解説，報告などその他の出版物で特に参考になるもの
ニ）主な原著論文別刷または著書　5篇（複写可）
ホ）今後の教育・研究の計画・抱負（2,000字程度）
ヘ）本人に関して意見を聞かせて頂ける方2名の氏名と連絡先
応募締め切り：2001年3月16日（金）必着
封筒の表に「教官公募関係」と朱書し，簡易書留にて郵送すること．
書類の送付及び問い合わせ先：
〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻　小笹隆司
電話：011-706-3587（ダイアル・イン）
Fax：011-746-0394
電子メール：kozasa@ep.sci.hokudai.ac.jp



## 報告

本会委員会以外の研究会・委員会等よりのお知らせを掲載します．

### 第18期第1回地球化学・宇宙化学研究連絡委員会議事録

日　時：2000年11月16日(木)13:30～16:30
場　所：日本学術会議第4部会会議室（6階）
出席者：青木謙一郎（会員），海老原　充（地球化学），日下部　実（地球化学），清水　洋（地球化学），下山　晃（化学），田結庄良昭（地質），田中　剛（地球化学），留岡和重（鉱物），中澤高清（地物研連），中村栄三（岩鉱），藤原　顕（地物研連），松田准一（地球化学）
今期の委員12名全員出席．

会に先立って自己紹介の後，委員長に田中剛委員を，幹事に青木謙一郎委員，海老原充委員，清水　洋委員を推薦により選んだ．

青木会員より学術会議の構成の概略について説明があった．

#### 報告事項

1.　学術会議関係（青木委員より）
1.1.　第134回総会（10月31日，11月1日開催）
(1)　第18期活動計画（案）を承認した．
次の2つを今期の活動計画の柱とすることを採択した．
①人類的課題解決のための日本の計画（JAPAN PERSPECTIVE）
②学術の状況並びに学術と社会の関係に依存する新しい学術体系の提案
(2)　常置委員会，臨時（特別）委員会及びその他組織の構成と課題
組織・制度，学術と社会，学術の在り方，学術体制，学術基盤情報と国際協力の6常置委員会の審議，検討内容が決まり，また次の7臨時（特別）委員会の構成と課題が承認された．①価値観の転換と新しいライフスタイル，②ジェンダー問題の多角的検討，③ヒューマン・セキュリティの構築，④情報技術革新と経済・社会，⑤循環型社会，⑥生命科学の全体像と生命倫理，⑦教育体系の再構築
(3)　日本学術会議会則の一部改正（案）について
4課題別研究連絡委員会を廃止し，新たに4課題別研究連絡委員会を設置することが承認された．

1.2.　第4部会（9月28日，10月31日，11月1日）
(1)　小委員会について（新規設置申請）
海洋物理研連よりGODAE/ARGO小委員会設置申請が行われ，承認された．
(2)　平成13年度代表派遣会議及び代表派遣候補者の推薦について
12月1日までに申請手続きをする（地球化学・宇宙化学研連は来年度は割り当てがない）．
(3)　平成14年度予算概算要求要望事項について
研連からの要望として，平成14年度国際学術団体分担金要求調書と平成14年度国際会議代表派遣旅費要求資料について平成13年3月22日までに提出する．
(4)　平成14年度科学研究費補助金審査委員候補者の推薦作業等について
平成14年度科学研究費補助金分科細目別対応研連一覧表の訂正について，地球科学関連では窓口研連，対応研連の変更について承認された．細目「地球化学」の窓口研連は従来通り地球化学・宇宙化学研連とし，対応研連の鉱物研連を削除した．
(5)　研連の見直しと理学の振興について
両問題については，ワーキンググループを設置して検討することが了承された．
(6)　会議の公開についての部会での検討
総会，運営審議会，連合部会，部会，運営審議会付置委員会，研究連絡委員会や会員推薦管理部会等の原則公開賛成，反対についての意見を各委員が提出し，部長が整理して第4部の意見として提出することとした．
(7)　平成14年度科学研究費補助金審査委員の推薦に関する作業日程について報告があった．

2.　第17期からの引き継ぎ事項（田中委員長）
第17期第9回委員会議事録をもとに報告があった．

#### 審議事項

1.　細目「地球化学」の科学研究費補助金審査委員候補者推薦の方法について引き継ぎ事項としての説明があり，平成14年度についても従来通り，関係18学協会に候補者の推薦を依頼することとした．
2.　第18期における活動方針について意見交換を行った．IAGCとの対応，各大学における組織の再編成に関連して地球化学・宇宙化学の将来計画の検討などが話題となった．

次回，第18期2回の委員会は2001年5月7日-14日の間に開催予定である．

## 鉱物学研究連絡委員会（第18期・第1回）議事録

日　時：平成12年11月24日（金）13：30～16：30
会　場：日本学術会議　第4部会議室（6階）
出席者：青木謙一郎（学術会議会員），山中高光(鉱物研連委員長)，赤荻正樹，松井正典，大谷栄治，井上厚行，吉田武義，松原聡，豊　遥秋，金田博彰，高橋正樹
欠席者：有馬　眞

### [議事に先立って]

青木会員により委員会の開催の弁が述べられた，その後18期の研連委員の自己紹介がなされた．18期の鉱物研連は会員1名，日本鉱物学会推薦4名，日本岩石鉱物鉱床学会推薦3名，日本資源質学会推薦2名，日本粘土鉱物学会推薦1名，日本地質学会推薦1名，計12名で構成される．

1.　研連委員長，幹事の選出

審議の結果，以下のように決めた．
研連委員長：山中，幹事：青木（学術会議会員），松井（書記），赤荻（渉外）

[報告事項]

1. 学術会議の紹介と第18期学術会議発足の報告（青木）

第133回総会（7月26，27日）

(1)　第18期役員，各種委員会委員の選出

会長に吉川弘之（第5部），副会長に吉田民人（第1部）と黒川清（第7部）各会員が，また第4部の部長に大滝仁志，副部長に土井範久，幹事に岩槻邦男と郷信弘各会員が決まった．

(2)　研究連絡委員会の構成・定数・世話人等について

地質科学関係研究連絡委員会については，地質学研連（15名，斎藤常正），鉱物学研連（12名，青木謙一郎），鉱床学専委（9名，青木謙一郎），地質科学総合研連（9名，米倉伸之），古生物学研連（12名，斎藤常正），第四紀研連（13名，米倉伸之），地球化学・宇宙化学研連（12名，青木謙一郎）

第134回総会（10月31，11月1日）

(1)　第18期活動計画（案）の承認

①人類的課題解決のための日本の計画（JAPAN PERSPECTIVE）と②学術の状況並びに学術と社会との関係に依拠する新しい学術体系の提案，の二つを今期の活動計画の柱とすることを採択した．

(2)　常置委員会，臨時（特別）委員会及びその他組織の構成と課題．

(3)　日本学術会議会則の一部改正(案）について．

第4部会（9月28，10月31，11月1日）

(1)　海洋物理研連よりGODAE/ARGO小委員会設置申請が行われ，承認された．

(2)　12月1日（金）までに平成13年度代表派遣会議と代表派遣候補者を推薦する．

(3)　研連からの要望として，平成14年度国際学術団体分担金要求調書（既加入のみ）と平成14年度国際会議代表派遣旅費要求試料を平成13年3月22日（木）までに提出する．

(4)　平成14年度科学研究費補助金分科細目別対応研連一覧表の修正について，地球科学関係では，窓口研連，対応研連の変更について承認された．細目「岩石・鉱物・鉱床学」の窓口研連は鉱物研連，対応研連は地質科学総合研連である．

(5)　研連の見直しと理学の振興について，ワーキンググループを設置して検討することが承認された．

(6)　会議の公開についての部会での検討

(7)　平成14年度科学研究費補助金審査委員の推薦に関する作業日程

①平成13年2月，日本学術振興会より候補者推薦依頼（予定）
②　同　3月，平成13年度科学研究費補助金審査終了
③　同　3月，平成13年度審査委員リスト及び継続審査委員リスト発送
④　同　5月末，平成14年度審査委員候補者リスト提出
⑤　同　7月，日本学術振興会へ候補者リスト提出

2.　前期の鉱物研連の活動の報告（山中）

第17期研連の活動報告がなされた．その要約を以下に示す．

17期研連委員会は任期中10回の委員会が開かれた．

国際対応

(1)　過去IMA総会の日本開催の誘致活動を行ってきたが，1998年8月カナダトロント

## 白尾元理写真展「日本列島の20億年」を富士フォトサロンにて開催

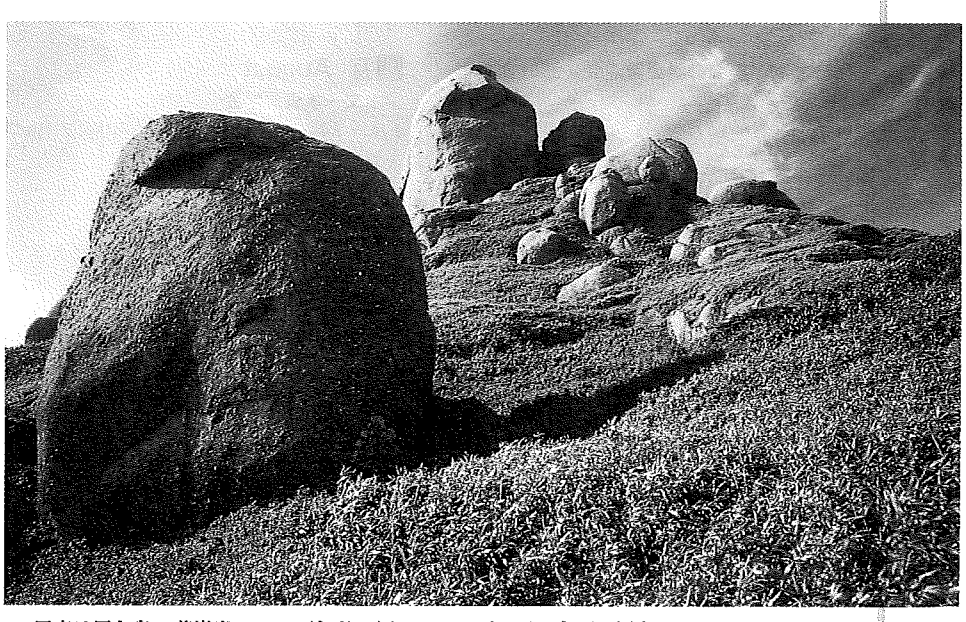
タイトル：白尾元理写真展「日本列島の20億年」
期　間：2001年3月30日（金）
～4月5日（木）
午前10時～午後8時
最終日　午後2時迄
会　場：富士フォトサロン（銀座ファイブ2F）入場無料
作品点数：カラー35点

＜お問い合わせ＞
白尾元理
〒111-0035東京都台東区西浅草1-3-11
電話　03-3844-5869　Fax 03-3844-5930
E-mail : motomaro@ga2.so-net.ne.jp
富士フォトサロン
〒104-0061 東京都中央区銀座5-1銀座ファイブ2F（旧スキヤ橋センター）
電話 03-3571-9411　Fax 03-3289-0751

＜写真展作品紹介＞

日本列島の美しい自然を育んできた地形や地質．20世紀後半50年間の地球科学の進歩によって，ようやく日本列島がどのようにして誕生し，現在のようになったかがわかってきました．物語は20億年前にはじまります．この写真展では高々度からの空撮，日本各地の秘境，あるいは私たちが日常見慣れている風景の中にある岩や地形の写真から日本列島の歴史を紹介します．是非ご高覧下さい．

（白尾元理）



写真は屋久島の花崗岩．2500万年前に固まったマグマが，多雨に浸食されてできた岩塔．

市で行われた第17回IMA総会で2006IMAの日本開催の承認を得た．
(2) IMAの日本代表は末野重穂研連委員長とした．
(3) IMA各種国際委員会（1998–2002）日本代表を決定しIMAに紹介した．
(4) IMA分担金480ドルを送金した．
(5) 各種国際会議代表派遣を学術会議に申請した．

学会合同シンポジウム

日本鉱物学会，日本岩石鉱物鉱床学会と研連と合同主催でシンポジウムを行った．

地学関係教室アンケート

近年行われた各大学での組織変更（重点化，講座統廃合など）にともない，地学関係教室の現状の調査を目的にワーキンググループを設置した．アンケート調査ならびに便覧を作成した．その結果を関係学会誌に掲載した．

IMA組織委員会の発足

2006IMAの日本開催が正式に内定したことにより，IMA誘致委員会（委員長，末野重穂）を改組しIMA組織委員会を発足した．同組織委員会から，委員長は山中高光との報告を得た．

17期より継続審議事項

(1) 高校地学教育について
(2) 大学，研究所の独立行政法人化について
(3) 科学研究費補助金
(4) OD問題について
(5) 地球物質科学関連の会誌雑誌統合について
(6) 地質科学関連学会連合連協（地連協）との関連について

[審議事項]

1. 平成15年度科学研究費補助金から，分科・細目が大幅に変更される予定である．鉱物研連としては，細目「岩石・鉱物・鉱床学」が従来同様，独立の細目として継続されることを，関係各機関に要望することを申し合わせた．
2. IMA（国際鉱物学連合）の日本代表を末野前鉱物研連委員長から，山中鉱物研連委員長が引き継ぐことに決めた．
3. 次回の鉱物研連委員会を，3月9日（金）13:30から開催することにした．

# CALENDAR

2001, 3～

地球科学分野に関係する研究会，学会，国際会議などの開催日，会合名，開催学会，開催場所をご案内致します．会員の皆さまの情報をお待ちしています．

☆印は，日本地質学会行事．

## 3月 March 2001

**☆日本地質学会近畿支部**

*10日（土）* 場所：大阪市立大学理学部

**○第2回地質汚染調査浄化シンポ「天然資源による地質汚染浄化手法—21世紀環境地質学の理論と実践その1」**

*26日（月）10：00～16：00* 場所：北とぴあ飛鳥ホール（東京都北区王子，03-5390-1105，JR王子駅徒歩3分）参加費（資料代とも）：一般3,000円 学生・院生1,500円

**○日本海洋学会の学会講演会 2001年度春季大会**

*27日（火）～30日（土）* 場所：東京大学教養学部

**☆日本地質学会北海道支部2000年度総会・例会**

*24日（土）* 場所：北海道大学理学部5号館大講堂

## 5月 May

**○日本気象学会 春季学会**

*8日（火）～10日（木）* 場所：東京大学安田講堂

**○堆積学研究会春の例会**

*10日（木）～13日（日）* 場所：京都大学 ホームページ//geogate.shinshu-u.ac.jp/SSJ/flame.html

## 6月 June

**○2001年地球惑星科学関連学会合同大会**

*4日（月）～8日（金）* 場所：代々木国立オリンピック記念青少年総合センター

**○資源地質学会2001年度年会**

*13日（水）～15日（金）* 場所：東京大学山上会館

**○日本古生物学会2001年年会**

*29日（金）～7月1日（日）* 場所：国立オリンピック記念青少年総合センター
統一テーマ「21世紀の古生物学」（学会将来計画委員会主催）・シンポジウム 題名：「21世紀の古生物学」 世話人：日本古生物学会将来計画委員会 注：2001年年会の口頭発表は全てシンポジウム形式とし，一般講演は，ポスターに限って公募する．

## 8月 August

**○水文・水資源学会**

*1日（水）～3日（金）* 場所：甲府市（山梨大学工学部他）

**○日本第四紀学会大会**

*1日（水）～5日（日）* 場所：鹿児島大学

**○地学団体研究会第55回総会**

*3日（金）～5日（日）* 場所：山形大学

**○構造地質研究会 第3回日韓構造地質研究会合同大会**

*21日（火）～23日（木）* 場所：韓国資源研究所（大田）

## 9月 September

**○国際エクロジャイト会議（IEC）**

*1日（土）～7日（金）* 場所：愛媛県総合科学博物館（愛媛県新居浜市）および別子・赤石山系 公式ホームページhttp://ganko.eps.nagoya-u.ac.jp/iec2001/index.html

**☆日本地質学会第108年学術大会**

*21日（金）～23日（日）* 場所：金沢大学（石川県金沢市）

**○日本岩石鉱物鉱床学会**

*27日（木）～29日（土）* 場所：秋田大学

## 10月 October

**○日本火山学会 秋季大会**

*1日（月）～4日（木）* 場所：鹿児島大学

**○日本海洋学会の学会講演会 2001年度秋季大会（60周年記念大会）**

*5日（金）～9日（火）* 場所：東海大学海洋学部（清水）

**○日本気象学会 秋季学会**

*10日（水）～12日（金）* 場所：岐阜県民文化ホール

**○地球化学会年会**

*18日（木）～20日（土）* 場所：学習院大学

## ☆北海道支部

### 2000年度総会・例会のご案内

日本地質学会北海道支部2000年度総会・例会を下記の要領で開催いたします.
万障お繰り合わせの上，多くの方のご参加をお待ちします.

**日　時：2001年3月24日（土）**
**13：00–13：30　支部総会**
**13：30–17：00　支部例会**
**17：00–　懇親会**
**会　場：北海道大学理学部5号館大講堂**
**内　容：支部総会・個人講演**

＜講演プログラム（1発表につき，発表15分，質疑5分，計20分）＞

加藤孝幸（アースサイエンス）・川村信人（北大院・理）・加賀　新（茨城大・理・地球生命環境）・斉藤晃生・佐々木克久（アースサイエンス），「空知—エゾ帯，沙流川層枕状溶岩に産する赤色のコロフォーム状カルセドニー」
植田勇人（北大院・理）・日高収束帯研究グループ，「神居古潭帯中の雁皮山コンプレックスは周辺地質体と類縁性をもつか？」
川上源太郎・川村信人（北大院・理），「漸新統紅葉山層の流紋岩質凝灰岩中に見出された変成岩片とその意義」
高橋裕平（地質調査所北海道支所），「消光角変化曲線の作成とその応用」
八幡正弘（道立地質研究所），「有珠火山の基盤地質と変質作用」
佐藤　明・岡村　聡（北海道教育大札幌）・野呂田晋（道立地質研究所），「西南北海道，後期新生代背弧側火山岩類のマグマ生成モデル」
能條　歩・高田裕行（北海道教育大岩見沢・理科教育），「石狩低地帯中央部馬追層産出の有孔虫化石（予報）」
佐藤　彩・木村方一（北海道教育大札幌），「阿寒町産哺乳動物化石群の分類と比較形態学的研究(4)」
鵜野　光・箕浦名知男・鳴島　勤・越前谷宏紀・永井克尚・水上賢治（北大院・理），「北海道幌加内町の築別層から発見された*Desmostylus*（Mammalia; Desmostylia）の下顎化石」
嵯峨山積・内田康人（道立地質研究所海洋地学部），「北海道浅海域の地形・底質調査と海洋深層水の利用」
岡　孝雄・田近　淳・大津　直・廣瀬　亘・岡崎紀俊・石丸　聡（道立地質研究所），「北海道による石狩低地東縁断層帯（活断層）調査の取りまとめ結果」
櫻井和彦（穂別町立博物館），「川原で石を見よう—地域の地質を教材に活かす試み—」

＜留意事項＞
なお，講演要旨は，2001年3月16日（金）までに以下の要領で，北海道教育大・岡村までお願いします.

・原稿：文章は横書きで，要旨の初めに講演題目・講演者名・所属を明記.
・用紙：A4判の縦置き，4ページ以内．周囲の余白を，上下各30mm，左右各25mm以上とる.
・原稿の送付：2001年3月16日（金）までに郵便（または手渡し）でお送り下さい.

原稿はそのままのサイズでコピー・製本しますので，作成の際は文字の大きさ・行間など，仕上がりが鮮明なものになるようご配慮願います．e-mailで送られる場合は，Microsoft Word 98にて，フォーマットされたファイルを，BinhexまたはBase64に変換して添付してください．これ以外の方法による電子メール送信は受け付けません．なお，Faxによる送付はご遠慮下さい.

講演要旨集は，当日配布します．講演順序は入れ替わることがありますのであらかじめご了承下さい.

＜問い合わせ先＞
郵便：〒002–8502 札幌市北区あいの里5条3丁目1
北海道教育大学札幌校地学教室
岡村　聡
Fax：011–778–0386
E-mail：okamura@sap.hokkyodai.ac.jp

## ☆近畿支部

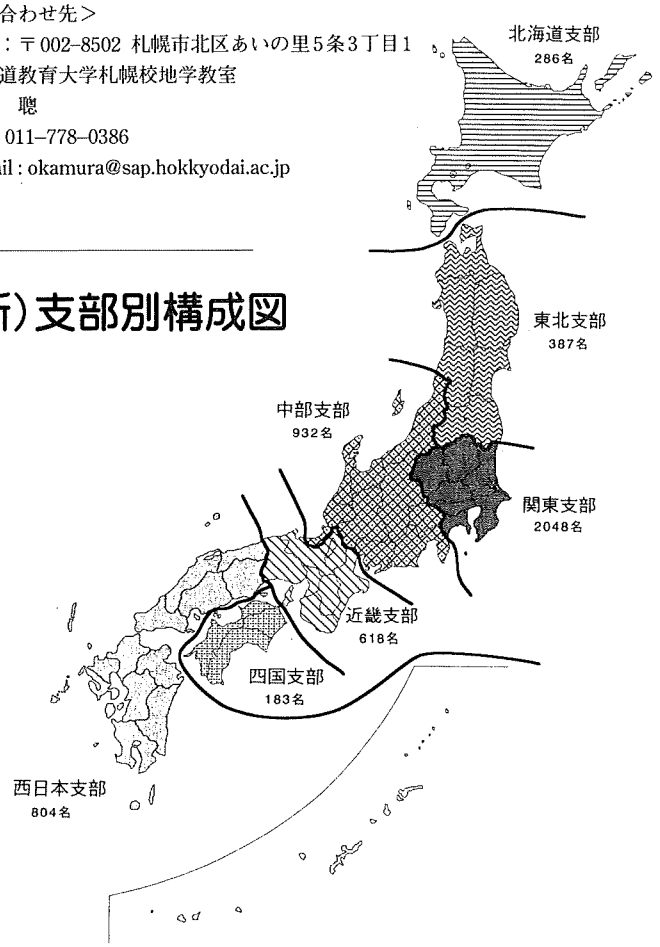
### 総会・講演会のご案内

学会運営細則の改正により従来の支部体制が変更され，新しく誕生した「近畿支部」の総会・講演会を下記のように行います．今回は「近畿支部」発足の最初の総会・講演会となります．近畿支部（滋賀・奈良・京都・三重・大阪・和歌山・兵庫の会員およびそれ以外の会員）の会員の皆様の参加をお待ちしております.

**期　日：2001年3月10日（土）**
**時　間：午後2時から5時（予定）**
**会　場：大阪市立大学理学部（JR阪和線「杉本町」下車徒歩5分）**

（問い合わせ先）
606–8502 京都市左京区北白川追分町
京都大学理学研究科地質鉱物学教室内
日本地質学会「関西支部」事務局
電話 075–753–4166（神谷）Fax：075–753–4189
E-mail：kamiya@kueps.kyoto-u.ac.jp

## （新）支部別構成図



院生コーナー

# ODP航海体験記

成瀬　元（京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻博士後期課程1年）

私は昨年9月13日から11月9日までの約2か月間，ODP航海Leg 192に参加しました．この航海は太平洋ソロモン諸島の北にあるオントンジャワ海台の基盤岩を掘削することを主な目的としており，最終的に5つのサイトで掘削が行われ，4つのサイトで基盤岩を得ることに成功しています．航海の主要な成果についてはすでにウェブサイト上でPreliminary reportが公開されています（http://www-odp.tamu.edu/publications/prelim/192_prel/192toc.html）ので，そちらを参照していただくことにして，この文章ではどちらかというと船の中での生活やその中で私が感じたことなどについて報告をしたいと思います．すでにODP航海を経験している人にとってはあたりまえのことばかりなのかもしれませんが，海洋調査船に乗るのもはじめての私にとっては何もかもが驚きの連続でした．

今回の航海は幸い晴天に恵まれ，ひたすら青空と穏やかな海という単純だけれどもすばらしい景色を楽しむことができました．毎日の夕焼けが非常に美しくて，日没時には船のあちこちから屋上に人が集まり，陸で見るのとはずいぶん印象の違う光景をみんなで楽しむのが恒例行事となっていました．

天気が良かったことに加えて，ODP航海に用いられるJOIDES Resolution号は大型船である（全長143 m，最大排水量18,636トン）こともあり，ほとんど揺れを感じることもなく船内生活はじつに快適でした．ただ，参ったのは船の中が寒かったということです．外は赤道直下なので夏の京都に匹敵するほど暑いのですが，中はがんがんに冷房が効いており，おそらく気温は20℃以下だったのではないかと思います．私ともう一人の日本人（富士常葉大学の佐野さん）は長ズボンにトレーナーを着込んで寒がっていました．一方，西洋人は半ズボンにTシャツでなぜか平気な顔でした．おそらく体感温度というものが違うのでしょう．

さて，生活面でまず一つ驚いたのは，食事が非常に豪華なものであったということです．2か月も無寄航で航海するわけで，おそらく食事は保存食のようなものばかりだろうと高をくくっていたのですが，予想は完全に裏切られました．さすがに日本食はないものの様々な国の料理がそろっており，味も十分満足のいくものです．新鮮な野菜が最初の1か月で消えてしまったのが残念でしたが，草履のようなステーキ，手作りのデザート，飲み放題のジュースやコーヒー，毎日4回提供される焼き立てのクッキー，などなどを毎日堪能することができ，体重的にも得ることの多い航海でした．

船の中は2か月の間乗員を退屈させないように様々な工夫がされています．娯楽のために約500本の映画ソフト（ビデオ，LD，DVD）が用意されており，一日に3-4回上映会が開かれました．仕事時間外であれば自由に参加でき，私もかなりの本数の映画をみました．一般に欧米人は非常に映画好きで，どの映画を見るか議論しているのを横で聞いていると，彼らが驚くほどの本数の映画の内容を知っていることがわかります．黒沢映画をはじめとする日本映画に造詣の深い人もかなりいました．

一方，日本人はおそらく欧米人に比べてかなり読書好きなのではないかと思います．船の中の娯楽用の図書館は，かなりの部分が日本語の文庫本で占められていました．それらはおそらく歴代の日本人研究者によって寄付されたもので，私も4-5冊寄付してきました．赤道直下の日差しのもとで寝転がって本を読むのはとても素敵なことなのですが，あまり他の人々は読書をすることなくひなたぼっこに専念していました．

Fig. 1. ハロウィーン仮装凧揚げ大会のひとコマ．黒いスーツとサングラスをかけてヤクザに扮しているのが筆者．

その他の娯楽設備としては，トレーニングジム（ウェイトトレーニング施設，卓球台）もあり，ヘリポートでランニングもできます．また，誰かの誕生日パーティーやハロウィーンパーティー（Fig. 1）など，しばしば娯楽用のイベントが用意されており，乗員を飽きさせません．船の中の決まりで，酒が飲めないのが玉に瑕ですが．

それから，赤道祭りというとんでもないイニシエーション（？）もあります．赤道を通過したことのない未熟な船乗り（Pollywogと呼ばれる）が経験者達（Shellback）によって何らかの罪に問われ（ちなみに私の罪状は飯の食いすぎでした），目隠しをされて泥のプールの中にいきなり叩き込まれるという儀式です（Fig. 2）．いったいどこの宗教儀式かとおもえば，どうやらイギリス海軍の伝統なんだそうです．

船の中の人間は，昼12時から夜12時まで働くDay shiftと，夜12時から昼の12時まで働くNight shiftという二つの班に分けられ，24時間体制で作業が続けられます．船の中は多国籍軍ですが，今回の航海に関してはアメリカ人とイギリス人が大半を占め，英語がもちろん公用語です．ただし，日本人が英語が苦手ということはよく知られているようで，変な発音やら文法ミスやらについてはまったく気にされず，研究に関してはうまくコミュニケーションを取ることができました．食事中の雑談となると会話のスピードについていけない場面が時折ありましたが，全体としては非常に和やかに共同生活を行うことができ，これからも友人として付き合っていけそうな人達と出会うことができました．

毎日遊んでいたと思われると困るので，研究面についても少し触れたいと思います．まず，航海が始まる以前に，極めて綿密にサンプル採取後の分析手法やその担当者について計画が練られているということに驚かされました．特に，大量にサンプリングすることの難しい火成岩が今回のターゲットであったため，サンプルの分配で揉め事が起こらないようCo-chief達は苦心していたようです．にもかかわらず，やはり予想外のことというものは起こるもので，あるサイトでは火成岩と思われていた層準がすべて火山砕屑物であったというハプニングもありました．しかし，そのような事が起こっても緊急に船の上でミーティングを行い，サンプリングプランや研究計画を皆が納得のいくように練り直していました．全体として，綿密に計画を立てながらも柔軟に対応するという姿勢は大いに参考になりました．

また，よく言われることではありますが，日本の研究組織と欧米のそれとの大きな違いはテクニシャンによるサポートの厚さにあると強く感じました．Scientific partyは約50名なのですが（Crewは約70名），そのうちおよそ半分がテクニシャンで占められます．様々な測定装置の管理だけでなく，XRDやICPなどはテクニシャンがデータを出してくれるので，サイエンティストは純粋にデータの解釈に専念できる環境が整えられていました．コンピューターやネットワークに関しても専門家が3人もおり，日本のように院生や若手の助手がネットワーク管理者を兼ねるというようなことはありません．この辺は，もちろん予算の違いということもありますが（一度の航海で約6億円が消費される），文化の違いのようなものも

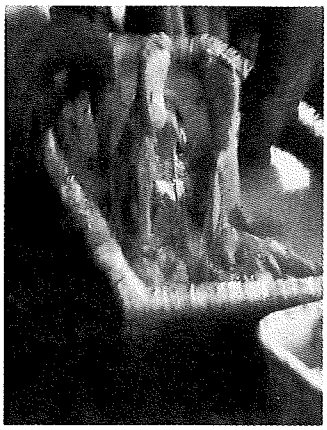


Fig. 2. 赤道祭り．まさに筆者が泥のプールに叩き込まれているところ．

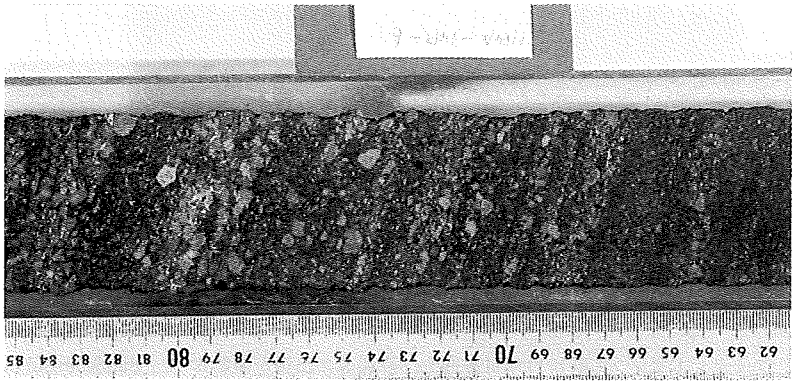


Fig. 3. ODP Site 1184で発見された火山砕屑物の接写写真．斜交層理が観察される．

感じます．日本の組織の場合，たとえ予算が潤沢にあったとしても，人を雇うよりは設備の充実などに金を費やすのではないでしょうか．

一方，資金を大量に使わせてもらえる分だけ，そのことに対して責任を負わねばならないということも痛感しました．もちろん，乗船によって得た成果をきちんとした形で公表しなくてはならないことは知っていましたが，まさか下船前にどこの雑誌にどんなタイトルで投稿するのかを表明させられるとは思っていませんでした．船の中でも，データの記載以外にInitial report（航海終了後1年以内に出版される報告書で船で行われた記載のすべてが公表される）の草稿の作成に追われ，仕事はかなり密度が濃く，肉体的にもきついものです．ただ，研究以外なにも考える必要のない生活というのは新鮮で，ある意味非常に楽しい経験でした．

経験という意味では，他の分野の研究者と交流ができたということがもっとも大きな収穫かも知れません．船の中には様々な分野の研究者が集結しており，2か月間に幾度もミーティングなどを通じて議論を行います．特に，私が普段あまり接触をしない火成岩や古地磁気の研究者がどのような手法を使っていて，今何を面白いと感じているかを，今回の航海で一部なりとも知ることができたように思います．

さて，最後に私自身のテーマについても少し述べます．オントンジャワ海台は日本の面積の約4倍にも及ぶ，巨大な洪水玄武岩のかたまりです．このような巨大火成岩区の成因としては，近年になってプリューム仮説と呼ばれるモデルが提示されています．オントンジャワ海台は世界最大の海台であることから，プリューム仮説の検証の場として注目されてきたのですが，今回の航海ではこれまでのモデルが説明することのできない数多くのデータが得られました．上でも少し述べた，予想外の層準で得られた大量の火山砕屑物もその一つです（Fig. 3）．プリューム仮説では，プリュームヘッドの地殻との衝突が洪水玄武岩からなる海台を形成するため，長くても500万年以内には噴火活動が停止することが予言されていました．オントンジャワ海台は大部分が122 Maの玄武岩よりなるのですが，周辺域には90 Maを示す玄武岩が分布していることがわかっています．今回火山砕屑物の堆積年代がさらに5,000万年も若い約40 Maであると推定されたことは，従来のシンプルなプリュームモデルではまったく説明がつきません．この火山砕屑物サクセッションの堆積履歴を明らかにすることはオントンジャワ海台の新しい形成モデルに制約条件を与えると思われ，また，その供給源の方角を明らかにすることは今後調査を行う上で極めて重要な情報となります．私の研究は微細組織の観察に基づいて火山砕屑物の粒度分布および粒子配列を解析し，この謎の火山砕屑物の堆積環境，供給源の位置，そして供給源の性格を明らかにすることを目的としており，現在船から持ち帰ったサンプルを分析しているところです．

様々な意味で興味深かったこの航海に参加することに協力していただいた方々に心からの感謝を述べ，この報告を終えたいとおもいます．どうもありがとうございました．またこのような航海に参加することができるのであれば，ぜひ挑戦してみたいと思っています．

**常時投稿をお待ちしております．院生コーナーの編集は，現在，以下の2人で行っております．e-mailでいただければ幸いです．**

698g5040@mn.waseda.ac.jp　島田耕史（早大）
moriya@gbs.eps.s.u-tokyo.ac.jp　守屋和佳（東大）

## 環境地質研究委員会：書籍，論文集（郵便振替　00130-5-701805　日本地質学会環境地質研究委員会）

- 第1回地球環境フォーラム“環境地質学からみた地球環境の諸問題”—地球環境研究100年の系譜—（30ページ，B5判，定価1,000円，送料190円）
- 第2回地球環境フォーラム“地域から地球環境問題を考える”（46ページ，B5判，定価1,000円，送料270円）
- 第2回環境地質学シンポジウム講演論文集（336ページ，B5判，定価2,000円，送料380円）
- 第3回環境地質学シンポジウム講演論文集（432ページ，B5判，定価2,000円，送料380円）
- 第4回環境地質学シンポジウム講演論文集（392ページ，B5判，定価2,000円，送料380円）
- 第5回環境地質学シンポジウム論文集（446ページ，B5判，定価2,000円，送料380円）
- 第6回環境地質学シンポジウム論文集（422ページ，B5判，定価2,000円，送料380円）
- 第7回環境地質学シンポジウム論文集（432ページ，B5判，定価3,000円，送料380円）
- 第8回環境地質学シンポジウム論文集（368ページ，B5判，定価3,000円，送料380円）
- 第9回環境地質学シンポジウム論文集（336ページ，B5判，定価3,000円，送料380円）
- 第10回環境地質学シンポジウム論文集（322ページ，B5判，定価3,500円，送料340円）

- 佐藤傳蔵著“地文学”完全復刻版（185＋4ページ，B5判，定価1,000円，送料400円）
- 東京ガス田上の地質環境と地下開発—地下開発におけるガス問題をいかに克服するか—（70ページ，B5判，定価1,000円，送料240円）
- 誰がだすべきか？「地質汚染調査・対策費」を　その1　有機塩素系化合物地質汚染を例として（129ページ，＋付録38，B5判，定価1,000円，送料310円）
- シンポジウム“地質汚染（その2）”（97ページ，B5判，定価1,000円，送料240円）
- シンポジウム“地質汚染—水質汚濁防止法の改正を実効あるものに—”（59ページ，B5判，定価1,000円，送料240円）
- シンポジウム“地質汚染—残土処理と地質環境”（91ページ，B5判，定価1,000円，送料240円）
- シンポジウム“地質汚染—地球環境の持続的開発と廃棄物最終処分場の閉鎖条件について”（46ページ，B5判，定価1,000円，送料200円）
- 国際シンポジウム“環境保全と鉱物資源の活用”（84ページ，A4判，定価1,000円，送料390円）

# The Island Arc

## The Island Arc だより

アイランドアークも創刊11年目を迎え，第10巻の出版が開始されました．1月30日現在，1号の著者校正を完了し，次の2号の誌面構成を始めているところです．1号の内容は通常論文5編と総説1編からなり，予定通り3月の発送準備に入っています．以下に目次を掲載いたします．

### The Island Arc Volume 10, Issue 1 (March, 2001)

#### Research Articles

Global carbonate accumulation rates from Cretaceous to Present and their implications in the carbon cycle model
*T. Nakamori*

Debris flow and slide deposits at the top of the Internal Liguride ophiolitic sequence, Northern Apennines, Italy: a record of frontal tectonic erosion in a fossil accretionary wedge
*M. Marroni and Luca Pandolfi*

$^{40}Ar$-$^{39}Ar$ analysis of phologopite in the Horoman Peridotite Complex, Hokkaido, Japan and implications for its origin
*I. Kaneoka, N. Takahashi and S. Arai*

Collision tectonics in the new Hebrides Arc (Vanuatu)
*S. Meffre and A. J. Crawford*

Bundelkhand mafic dykes, Central Indian Shield: implications for the role of sediment subduction in Proterozoic crustal evolution
*M.E.A. Mondal and T. Ahmad*

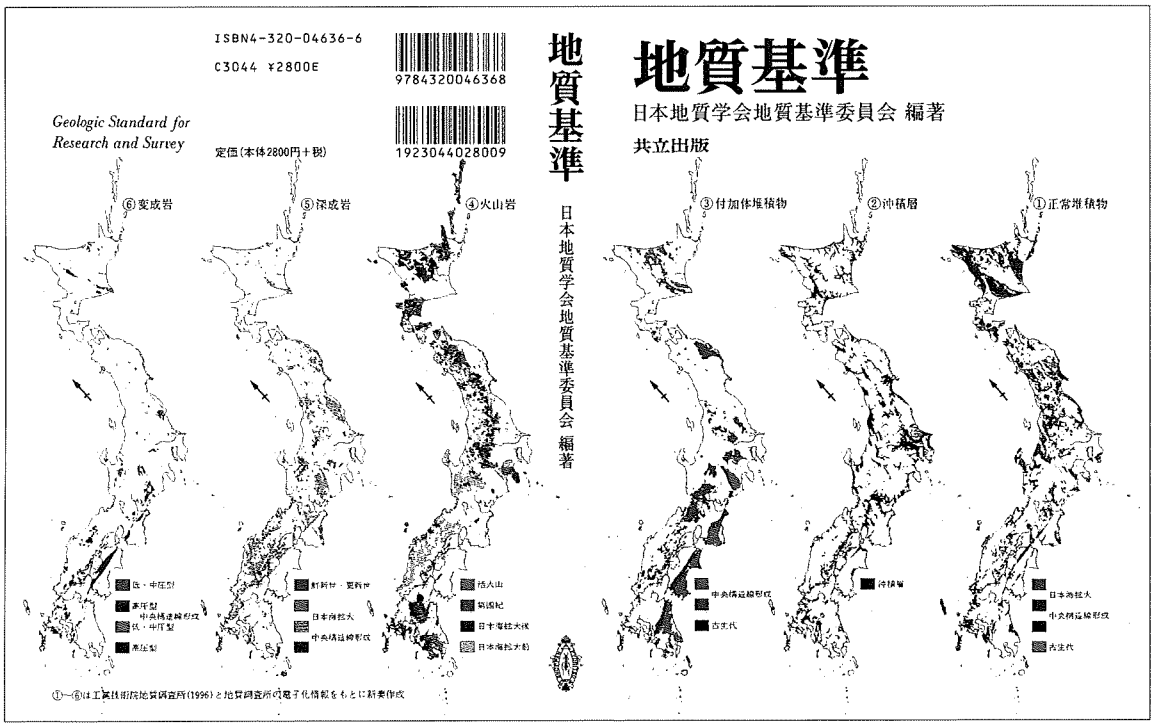
#### Review Article

New advances of seismic tomography and its applications to subduction zones and earthquake fault zones - A review
*D. Zhao*


**The Island Arc編集委員長**
小川勇二郎（筑波大学，電話 0298-53-4307, Fax : 51-9764,
E-mail : yogawa@press.geo.tsukuba.ac.jp）
巽 好幸（海洋科学技術センター，電話 0468-67-3381,
Fax : 66-1115 E-mail : tatsumi@jamstec.go.jp）

**The Island Arc編集事務局長**
渡部芳夫（地質調査所，電話 0298-61-3677, Fax : 61-3666,
E-mail : nabe@gsj.go.jp）
徳橋秀一（地質調査所，電話 0298-61-3676, Fax : 61-3666,
E-mail : toku@gsj.go.jp）


## 「第一次地質基準説明書」完成！




カバー図解説

この①—⑥の図は，本書が扱っている日本列島における地質体の分布図である．作図にあたっては，日本列島の形成・発展をできるだけ明確に表示できるように，時代区分した．時代区分に使用した日本列島におけるできごとは，"1500万年前の日本海の拡大" "1億3000万年前の中央構造線形成開始" "2億4500万年前の古生代—中生代境界" である．

地質体の分布図は，各地質体について記述した巻末のはじめに，白黒図として掲載した．カバーははずすことができるので，カバーの分布図を見ながら，各章の記述を読むことができるように配慮した．

予約された皆さまには2月末にはお手元に共立出版より直送されます．

### 2000年度第4回定例評議員会のお知らせ

標記評議員会を下記のように，3月31日（土）に開催いたします．傍聴希望の方は3月19日（月）10：00までに執行委員会宛，氏名・連絡先を記入した申請書をご提出ください．

2000年度第4回定例評議員会
日 時：2001年3月31日（土）13：00～18：00
場 所：北とぴあ 901号室

# 2000年度第3回定例評議員会議事抄録

2000年1月29日

日本地質学会評議員会議長　周藤賢治

日　時：2000年12月9日(土)12：30～18：00
場　所：北とぴあ　901会議室
出席者：小松正幸会長，平　朝彦・徳岡隆夫副会長，周藤賢治評議員会議長
(00-01) 足立勝治，赤羽久忠，荒戸裕之，磯崎行雄，板谷徹丸，伊藤谷生，井内美郎，菊地隆男，木村　学，久保和也，公文富士夫，斉藤尚人，佐々木和彦，佐瀬和義，柴崎直明，田崎和江，高須　晃，高橋正樹，高安克己，徳橋秀一，鳥海光弘，新妻信明，廣野哲朗，別所孝範，渡辺暉夫
(99-00) 会田信行，[秋葉文雄]，赤羽貞幸，[阿部国広]，[天野一男]，在田一則，上砂正一，[大友幸子]，小林和宏，[酒井治孝]，田結庄良昭，滝田良基，[巽　好幸]，[那須孝悌]，立石雅昭，楡井　久，[野村　哲]，マーティン，アンドリュー，松本俊幸，[丸山茂徳]，矢野孝雄，湯浅真人，吉川周作，渡部芳夫
([　] は委任状提出者)
(オブザーバー) 木村方一(北海道支部長)，西村祐二郎(西日本支部長)
(事務局) 水野篤行

冒頭に，水野事務局長より委任状提出評議員9名を含めて，本評議員会が成立していることの報告があり，周藤評議員会議長より木村・西村両支部長がオブザーバーとして出席することの紹介があった．また，報告事項の終了の後，議題の審議に入る前に立石執行委員長より，本日午前中に徳岡副会長の進行により，運営細則に基づく支部長連絡会が開催されたことが報告され，さらに両支部長の挨拶があった．

## 報告事項

### 1. 執行委員会報告

公文第一庶務委員長より次の報告があり，承認された．

(1) 第一庶務委員会

1) 次の研究助成等の推薦依頼・募集があった．
(1) 平成12年度東レ科学技術賞および東レ科学技術研究助成の候補者の推薦(締切：10.10)．
(2) 日産科学賞および日産学術研究助成候補者の推薦(締切：8.20)．
(3) 「朝日賞」候補者の推薦(締切：8.31)
(4) 「女性科学者に明るい未来をの会」，2001年度研究助成候補者(締切：11月末日と01年4月1日)と猿橋賞(締切：11月30日)．
(5) 第3回大学婦人協会守田科学研究奨励賞(締切：11月30日)．
(6) (財)日本科学協会平成13年度笹川科学研究助成募集(募集期間：9月1日から10月31日)．

2) 次の共催・協賛・後援等を承諾した．
(1) 第44回粘土科学討論会(日本粘土学会)(10.2～4，北海道大学)の共催．
(2) 第4回国際レルゾライト会議(2002.8.26～9.3，北海道様似町)の後援．
(3) 第15回「大学と科学」公開シンポジウム「セッション：ここまでわかった都市直下地震」(11月1日～2日，東京朝日ホール)の協賛．
(4) 「第4回国際土壌・地下水環境ワークショップIWGER 2001」(2001年1月19日)の後援．
(5) 海洋調査技術学会第12回研究成果発表会(2001年11月1日～2日)の協賛．
(6) 第14回国際オストラコーダシンポジウム「21世紀オストラコーダ学に向けて」(2001年8月1日～4日，静岡大学)
(7) 「第8回バイオミネラリゼーション国際シンポジウム，2001」(2001年9月23日～28日，新潟県黒川村)の共催．
(8) 「第4回国際ガスハイドレート」(2002年5月19日～23日，横浜シンポジア)の協賛．
(9) 「第39回原子力総合シンポジウム」(日本原子力学会内，「原子力総合シンポジウム」運営委員会主催)(2001年5月15日～16日，内幸町ホール)の協賛(運営委員として公文第一庶務委員長を推薦)．
(10) 国際フォーラム「地球を探る」(2000年11月24日，パルトピア山口，責任者：山口大学三浦保範氏)の協賛．

3) 次の転載等を許可した．
(1) 大阪市立自然史博物館長に対して，地質学雑誌106，3，p.V，第2図を大阪市立自然史博物館平成12年度第27回特別展「干潟の自然」に展示(平成12年7月17日～9月27日)．
(2) ゴンドワナ研究会吉田　勝会長に対して，日本地質学会第105年学術大会講演要旨，p.251(吉田　勝著)を，Metamorphism and tectonic evolution of eastern Gondwana Ghats and surrounding areas within East Gondwana (Gondwana Reaearch Group Miscellaneous Publications, No. 9)に転載．(8月24日付け)．
(3) 朝倉書店に対して，地質学雑誌93，P. 107～120の論文(高田　亮著)の第6，7図，ならびに105，P.574～584の論文(三野浩一郎・山路　敦著)の第4，5図を，山路　敦著「理論テクトニクス入門－構造地質学からのアプローチ」(同書店刊)に転載．(9月11日付け)
(4) 紺野義夫会員に対して，地質学論集53号，P. 300，第1図，P.302，第2図(金山著)を「石川県地質誌・補遺」(同会員著，2001年3月刊行予定)に転載．(9月9日付け)

4) 学術著作権協会との間の「複写に係わる総合権利契約書」中の「複写権等の内容」の条項への「複写に伴う譲渡」の追加に伴う覚書の締結に同意した．

5) 日本学術会議より6月30日付けで，「第18期日本学術会議の会員として推薦すべき者について」の通知があった．地質科学関係会員は次のとおりである．地質学―斎藤常正，鉱物学―青木謙一郎，地質科学総合―米倉伸之．

6) 日産学術研究助成(奨励研究)に対して，次の2件の推薦を行った．北村晃寿会員：日本海第四紀の急速な温暖化に対する浅海底生生物の応答；亀尾浩司会員：石灰質ナンノ化石の挙動からみた北大西洋鮮新世海洋環境変動史．

7) 7月17日付けでJABEE会長宛に，日本応用地質学会会長・日本地質学会会長・日本地下水学会会長名による「地質工学および地質工学関連分野」の認定に関する要望書を送付した．これに対して，7月27日付けでJABEE会長名により，「地質工学及び地質工学関連分野の設立計画に関する御申し出について」の返書が寄せられた．

8) 日本学術会議米倉伸之会員より8月22日付けで会長宛に，第18期太平洋学術会議研究連絡委員会の発足にあたり第17期に引き続き本会から塚脇真二会員を委員として推薦して欲しい旨の依頼があり，これを承諾した．

9) 7月19日付けで大学評価・学位授与機構長名により会長宛に「大学評価委員会専門委員及び評価員候補者の推薦について」の依頼があり，立石雅昭執行委員長が中心となって，推薦者をとりまとめ，8月21日に候補者の推薦書を提出した(臨時評議員会議事抄録参照)．これに対し，9月26日付け11月13日付けで小松会長宛に，本会からの推薦者として平副会長が理学系研究評価専門委員会評価員

として選考された旨の報告があった．

10) 渡辺暉夫会員より8月23日付けで，「テクトニックマップ研究委員会」を解散したい旨の申し出があり，これを臨時評議員会に諮ることとした（臨時評議員会議事抄録参照）．

11) 臨時評議員会（9月28日），臨時総会（9月29日）の議事運営について協議した．

12) (財)日本アイソトープ協会より9月29日付けで，「第38回理工学における同位元素・放射線研究発表会」に対する共催・共催分担金の依頼があり，これを承諾(共催分担金として1口3千円を拠出)，本年度に引き続き角井朝昭会員に運営委員を依頼した．

13) 地質調査所より10月18日付けで，坂幸恭前副会長に対する，同所の「地質図凡例等基準委員会（仮称）」の委員就任の依頼があり，これを承諾した．

14) 地質調査所より10月20日付けで，小松会長に対する，同所の「地質の調査」知的基盤整備勉強会委員就任の依頼があり，これを承諾した．

15) 渡辺暉夫会員より「地質環境の長期安定性に関する研究委員会」の設置申請が出され，第3回定例評議員会にこれを諮ることとした．

16) 松江大会の際の「JABEEに関する夜間小集会」の内容，結論（「地質工学分野の独立的な設立は困難とみられるので，資源分野との合同もやむを得ない」）が報告され，これを了承した．また，それに応じて，資源分野と地質工学分野の調整を含む「資源系技術者資格問題と技術者教育問題に関する調査研究委員会」への本会からの参加を了承した．

17) 日本応用地質学会の継続教育検討委員会から「技術士の継続教育に関する協議」への参加の申し入れがあった．これを了承して，とりあえず徳岡副会長と公文第一庶務委員長に委員を依頼した．技術士継続教育に関する3学会打ち合わせ会（12月8日，応用地質学会事務所）には公文第一庶務委員長が出席した．さらにこの件に関するワーキンググループを設置し，その委員人選については執行委員長と第一庶務委員長の検討に委ねることを第3回定例評議員会に諮ることとした．（議題へ）

18) 第18期日本学術会議研究連絡委員会委員候補者の選出について，9月10日付けで徳岡隆夫推薦委員会委員長から執行委員会宛に選出の経過と結果が報告され，これを了承し，臨時評議員会に内容を報告して，了承を求めることとした（臨時評議員会議事抄録参照）．

19) 平成12年11月21日付けで「テクノオーシャン・ネットワーク（仮称）」（任意団体）設立総会の開催と参加についての案内が同設立発起人会代表（東海大学酒匂敏次教授）より，送付された．内容的に工学分野なので，当面参加を保留することとした．

20) 科研費問題は，今後科目・細目の変更等に関し大きな問題となる．早急に審査委員候補者の選出方式を含めて，科研費問題検討小委員会において検討をしてもらうこととした．

### (2) 第二庶務委員会

高橋第二庶務委員長より次の報告があり，了承された．

1) 地質学論集の売上状況（1999年10月末現在）

| No.30 (1988) | No.31 (1988) | No.32 (1989) | No.33 (1989) | No.34 (1990) | No.35 (1990) | No.36 (1990) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1500 | 1000 | 1100 | 1000 | 1000 | 1500 | 1000 |
| 1400 | 802 | 948 | 789 | 846 | 974 | 891 |
| No.37 (1992) | No.38 (1992) | No.39 (1992) | No.40 (1993) | No.41 (1993) | No.42 (1993) | No.43 (1994) |
| 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 |
| 820 | 820 | 726 | 673 | 736 | 759 | 793 |
| No.44 (1995) | No.45 (1995) | No.46 (1996) | No.47 (1997) | No.48 (1997) | No.49 (1998) | No.50 (1998) |
| 1000 | 1500 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 | 1000 |
| 532 | 1365 | 594 | 448 | 541 | 510 | 865 |
| No.51 (1998) | | | | | | |
| 1000 | | | | | | |
| 314 | | | | | | |

1 号数の下の（ ）中は発行年度
2 第1段は発行部数
3 第2段は総売上部数

上記のほか，No.52（1999.10，800部）454．No.53（1999.11，700部）258．No.54（1999.12，600部）310．No.55（2000.1，700部）508．No.56（2000.3，700部）202．No.57（2000.9，600部）92．

評議員会に向けて，42号以下の編集代表者，売り上げ状況などの一覧を作成し，状況を報告するとともに，編集代表者，評議員各位に販売への一層の協力を要請することとした．とくに，52号以降は刊行後2年経っても印刷費回収ができない場合は買い取りの措置をお願いしているものもあるが，事前に販売促進を強力に訴えることをまず何度かお願いしてから対応することとした．

2) 上記とも関連して，地質学論集に関する新ルール，リーフレットの刊行規定(内規)，ともに金沢総会で報告・承認できるよう準備を進めることとした．

3) リーフレット「大地をめぐる水―水循環と地質環境」については執筆責任者に再度内容の検討を依頼中．

4) 「フィールドジオロジー」（編集責任者：秋山雅彦）全8巻シリーズ（共立出版）の企画が進んでいる．原稿締切：12月．来年の出版を目指している．各巻の内容および編集責任者は以下の通り．

第1巻 フィールドジオロジー入門（秋山・天野）
第2巻 層序と年代（長谷川・中島）
第3巻 堆積相研究の基礎（保柳）
第4巻 シーケンス層序と水中火山岩類（保柳）
第5巻 付加体地質学（小川）
第6巻 構造地質学（天野）
第7巻 変成・変形作用（高木・中島）
第8巻 火成作用（高橋）
第9巻 第四紀（遠藤・小林）

5) 松江大会の際に第二庶務委員会を開催し，次の結論が得られた．学校教育に関する討論を恒常的に行うための組織を設ける．「学校教育部会」的なものを考え，様々な階層の協力も得ながら小・中教員会員を中心に動けるよう探ることとした．

### (3) 会計委員会

佐々木会計委員長より次の報告があり，了承された．

1) 1999年度10月決算報告

2) 一正会員より7月11日付けで会長宛に，基金に対して50万円の匿名寄付をしたいとの申し出があり，これを受けることとした．その他，若干名の会員より寄付があったほか，「地震列島日本の謎を探る」の執筆者グループより印税の寄付があった（詳細については，後日報告する2000年度決算書に掲載）．

3) 財政問題検討委員会の答申内容に基づく財政再建の具体策を検討し，執行委員会の討議を経て，その内容を臨時評議員会に報告するとともに，ニュース誌10月号に掲載した．さらに検討を加えた結果を第3回定例評議員会に諮ることとした（臨時評議員会議事抄録及びニュース誌10月号参照）．

4) 2001～2002年度の会誌印刷社について4社に対して指名競争入札を行い，10月執行委員会において総合的に判断の結果，現在の印刷社である創文印刷工業株式会社を選定した．その後，さらに同社と印刷価格について折衝を行い，最終的な価格を決定した．

5) 出版社著作権協議会より，平成9年度徴収分の著作権使用料として50,000円を本会に分配するとの通知があった．

6) 事務局職員の退職金の積立に関し，中小企業退職金共済制度の活用がどの程度できるか検討を進めることとした．なお，関連して，雇用条件が不明確である現状が明らかとなり，この点についても検討する必要のあることが話し合われた．

### (4) 会員委員会

足立会員委員長より次の報告があり，了承された．

1) 会員の動静（10月末現在）

| | 賛助 | 名誉 | 正会員 | 院生 | 学生 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 2000. 5.31 | 49 | 62 | 4625 | 469 | 39 | 5244 |
| 2000.10.31 | 48 | 62 | 4639 | 548 | 52 | 5349 |
| 増・減 | −1 | 0 | ＋14 | ＋79 | ＋13 | ＋105 |

（＊会則変更により，院生は以下正会員に読み替え）

2) 次の入会承認を行った（敬称略）（11月6日現在）．計110名

賛助会員（1）：埼玉県環境科学国際センター（7.17）

正会員（30）：高井正成，国松　豊，松田ニーロ茂彦，間部一功，水上知行，坪倉直子，梶谷勝久，Solomon Woldemichael，別所秀高，津久井　修，古田孝純，松田順一郎，宇次原雅之，岩田昭夫，谷野宮竜浩，中島健男，田中　武，大谷　靖，加藤茂弘，木戸ゆかり，戸丸　仁，高貞善（以上7.17），大和谷　温，池田優典（以上9.11），谷口彰敏，小西祐作（以上10.16），京谷智裕，浦辺徹郎（以上11.6），野嶋宏二，横井　肇（以上12.4）

院生会員（70）：橋本　勘，篠崎　良，増本　清，西本壮志，真野謙作，古財祐介，斉藤　哲，三輪哲生，石田大輔，長谷川史彦，清水宏典，川地真司，藤田和弘，粕谷祐一，Danda Pani Adhikari，松本昌俊，谷　健一郎，南出幸代，早澤敬一，石井辰弥，後藤晶子，古田　梢，阿部剛，佐藤慶治，上原真一，藤井理香，小林　岳，中井聡子，岡橋久世，田辺真一，岩木雅史，金本高明，首藤拓郎，落合厚，兼子高志，厨川亮子，Faruque Ahmed，中野明美，Islam ABM Rafiqul，竹下欣宏，千葉惇一，渡辺弘明，名倉利樹，縄谷奈緒子，脇本理恵，永井香織，平原由香，山本　亮，秋山雅子，斉藤圭一郎，田中利治，岡村俊明，戸谷成寿，坂田伸哉，舘野満美子，清水　豊，市山裕司，今坂美絵，植村　眞，坂井　一，井原拓二，末岡正嗣，岩本直哉，横尾大介，石井英一，越前谷宏紀，金丸龍夫，岩村　陽（以上7.17），菅原憲博（9.11），小林記之（10.16）

学生会員（11）：加賀　新，河野義生，山部照幸，清水紀英，北川　陽，川島正照，井上卓彦（以上7.17），大金　薫，鈴木秀和（以上9.11），三井拓也，丹羽健人（以上10.16）

3) 逝去者（敬称略）（11月6日現在）計4名

名誉会員（1）：池辺展生（2000.11.5）

正会員（4）：小玉　久（2000.5.23），衛藤俊治（2000.8.8），佐藤敏彦（2000.10.11），鬼塚　貞（2000.10.24）

4) 次の退会承認を行った（敬称略）（11月6日現在）．計65名

賛助会員（1）：日さく(株)(北海道)（9.11），ジェイシーアール（12.4）

正会員（62）：鈴木七重，竹下　寿，生島潤，堀内俊秀，長谷川明生，安野泰伸，根本雅夫，細谷健介，水野閤映，日吉昌史（7.10），羽瀬　廣，根本周太郎，西澤章三郎，南野正彦（9.11），木村壮一郎，小澤幸重，高野　司，章　基弘，富樫敬悟，永井浩三，堀　伸三郎，Javad Izadyor（以上11.6），上水公子，安東努，池谷仙之，磯江芳朗，磯上篤生，伊藤澄雄，指宿敦志，宇野俊治，大島逸夫，大場与志男，大村昭三，岡村浩之，岡本金一，金子文宣，神谷昌幸，柄沢宏明，工藤　浩，香原鎮雄，近藤敏光，繁澤和夫，七字ひろみ，島村雅英，鈴木重人，高橋道雄，常山　太，寺戸康隆，長尾尚顕，林　文雄，平井　真，藤本雅太郎，Prakash Das Vlak，三崎　隆，水上寿英，宮本陽子，山田武雄，米倉伸之，Truonhg Dang Quang，若松隆二

院生会員（1）平田夏実

学生会員（1）：小山雅通（7.10）

5) 本年末に除籍予定の会費の長期未納者（平成9年度～12年度分）について，会計委員長と協議の上，評議員を通じて会費納入の請求を行い，また再三の会費納入の督促を行ってきたにもかかわらず，会費納入のない次の97名の会員（正会員95名，院生会員2名）を，審議の結果除籍することとした．

青木豊樹，秋元瑞穂，浅井健一，石井貴子，石下洋志，石田良二，伊藤友彦，井上和重，上杉孝彦，上原伸郎，梅本和裕，江藤史哉，及川　透，大越正浩，大橋信介，大森幹司，大和田　透，岡野肇，奥田述夫，小口　徹，落合達也，折本左千夫，梶原俊啓，片山　求，加藤愛，川崎　敏，北郷俊明，国沢輝仁，久保博之，久保田文雄，熊谷琢磨，黒川顕，小島敏弘，近藤　巧，後藤浩二，坂本高知，作本達也，佐藤鋭一，佐藤幸信，佐藤弘一，佐野賢二，三納正美，柴田真，柴田雅男，清水秀夫，鈴木彩子，鈴木　覚，鈴木　誠，鈴木雄吾，平　明夫，高橋　淳，高橋　渉，滝口信吾，竹田史朗，谷崎久美子，田端紀裕，張　初勝，恒松知樹，照屋　純，長崎与志男，二宮悟，縫部保徳，畠山康英，林　武広，Parkinson C.Q.，東野浩史，肥後丈彦，蛭沼紀江，藤澤昭子，藤本樹快，堀　信雄，Puelles Pablo，前田孝雄，松井公平，松本　淳，Moung Myo Tint，三谷　卓，箕輪英雄，宮城島敏文，村松二郎，百嶋輝，百瀬　敦，安田直樹，山岸　啓，湯沢正農夫，吉川勇二，Rajesh H.M.，李年揆，姜　淳錫，金　鐘憲，谷藤隆三，李　裕大，金　正珍，李　倫鐘，井上善夫（以上正会員），猶原亮介，眞部由華（以上院生会員）

6) 会員委員会を9月21日に開催し，会員名簿の作成，名誉会員の推薦，パンフレットの作成等の検討を行った．

7) 会員名簿の作成を予定通り進めた．なお，名簿作成に関して情報公開法及び関係法律の整備法による会員個人情報の開示との関係，来年4月に法人化する研究機関の会員がかなりの数にのぼると予想されることなどから，発行をのばしてはどうかとの議論があったが，全会員から掲載内容の承認を得ることは不可能であり，またすでに名簿の広告掲載の契約を行っていることから，予定通り作成・発行することとした．ただし，会員個人情報の開示の点から，今後は掲載希望者だけの掲載を考えることを検討する必要性，新規入会の際に名簿への掲載希望の有無をきく必要があるとの意見が出された．

8) 会員の退会・除籍については，新会則により，入会とともに，執行委員会の審議事項とすることとした．

**(5) 編集委員会**

渡部・荒戸両編集委員長より次の報告があり，了承された．

1) 地質学雑誌の編集状況（12月4日現在）
106-12　論説　5　短報　3　ノート　1
2000年第106巻目次（91p，校正中）
107-1　論説　5　短報　3　ノート　1（入稿済み）
受理済み論文　論説　6
査読中論文　48
投稿数（2000年）　論説（和文44，英文6）　短報（和文8　英文8）　総説（和文1）　討論（和文2）　ノート（和文3）　合計72　口絵（英文2　和文10）　合計12

2) 編集規約の一部改正について12月執行委員会で検討の上，議題（その他）において提案することとした．（議題へ）

3) 地質学雑誌（10月号，11月号）の表紙裏に「地質学雑誌における鉱物名略号」の統一案を掲載した．

**(6) 行事委員会**

伊藤行事委員長より次の報告があり，了承された．

1) 第107年年会・臨時総会（松江大会，2000年9月29～10月1日，島根大学）

順調に進行，終了した．参加者1,056名（内，事前申し込み793名）．講演申し込み680件，懇親会参加者230～250名であった．10月1日に行事委員会を開催，大会運営に関するレビューを行った．

臨時総会（9.29）の記事はニュース誌11月号に掲載した．年会の記事は1月号に掲載する．

2) 第108年総会・年会（2001年秋，金沢，9.21（金）～9.23（日））

第10回準備委員会（12月2日）の報告が日程案も含めて送られてきた．具体的な準備の活動が始まっている．巡検は12コースを計画中．また，市民向けシンポジウムとしては，10月7日に「金沢フィールドスクール：見て，触って，手

にとって，体験地質学」，9月22日～24日に「北陸フィールドスクール；見て，触って，手にとって，地球環境学」を計画中，前者については，地質学会より文部省科研費補助金（研究成果公開発表(B)」に対して申請中．次回準備委員会は12月22日．

準備委員会構成は下記のとおり．

組織委員長：大村明雄　事務局長：荒井章司　会計係：田崎和江・小川義厚　プログラム係：長谷川　卓・石渡明・長谷部徳子・田村芳彦・佐藤　努　会場係：加藤道雄・塚脇真二・大村明雄　巡検係：石渡　明（会員向け）・溝口（市民向け）　シンポジウム係：荒井章司・田崎和江・古本宗充・加藤道雄　宿泊・交通係：佐藤　努　懇親会係：酒寄淳史・杉本幹博　行事委員：田崎和江　相談役：紺野義夫・小西健二・服部　勇・藤井昭二

3) 第109年総会．年会（2002年，秋）（議題へ）

4) 今年度から地球惑星合同大会への参加を地質学会として組織的に進めることとした．

伊藤行事委員長に対して合同大会の幹事会議長就任が要請され，これを引き受けることとした．幹事会からは次年度大会プログラム委員会に向け，地質学会から正副プログラム委員を出すよう要請があり，行事委員会で検討の上，行事委員会委員から正プログラム委員として，木村克己会員，副プログラム委員として安藤寿男会員に御願いすることとした．その後，両委員を中心に地質学会としてのセッション，コンビーナーを組織中．他学会との協賛を含めて順調に進んでいる．1月には正式にセッションが確定し，講演募集が始まる予定である．

**(7) 国際交流委員会**

湯浅国際交流委員長より，新執行体制の中での同委員会の内規案を作成している旨，紹介された．

**(8) その他**

立石執行委員長より次の報告があり，とくに1)，2)について質疑・討論の上，それぞれ了承された．

1) 松江大会の巡検案内書の一部の内容の問題について

辻森　樹会員から巡検案内書の一部の記述内容に関して執行委員会に対して意見が寄せられ，対応が求められた．執行委員会において協議の上，執行委員長が準備委員会と連絡をとり，対応を協議することとした．この件に関し，その後，板谷徹丸以下7名の評議員から，本評議員会に対して「研究ハラストメント委員会設置について」の議題追加の要望が出された．一方，筆頭執筆者の高須　晃会員から当日付けで，「謝罪の意を表明」した文章が執行委員会に対して提出された．この問題についての対応に関し，議題に入る前の休憩時に会長，評議員会議長，追加議題提案評議員の代表者，執行委員長の間で協議することとしたいので了承をお願いしたい旨，執行委員長から報告があり，了承された．

2) 意見書のニュース誌への掲載について

臨時総会の席で会員から意見書をニュース誌に公開することが要望され，執行委員会と評議員会議長の協議でこれを検討することとなった．意見交換の上，すでに総会で議論され，公表された総会記事と臨時評議員会議事抄録のなかで記述されているので，掲載の必要はないという執行委員会の見解が本評議員会で了承された．

3) 改正された運営細則のもとでの各組織，委員会の内規作成について

各関連執行委員が原案を作成して，検討を進めることとした．

4) 定期刊行物検討ワーキンググループの答申（提案2）への対応について

臨時評議員会での執行委員会からの提案の了承に基づき，答申の提案2への今後の対応について検討し，その結果を第3回定例評議員会に諮ることとした（臨時評議員会議事抄録参照）．（議題へ）

5) 各賞選考と名誉会員の推薦について

執行委員会において総会の時期の変更に伴う各賞選考方式の変更について検討した．（議題へ）

名誉会員の推薦について，2001年秋の総会での推薦に向けて，具体的なスケジュールを検討する必要があり，名誉会員推薦委員会に依頼することとした．

6) The Island Arc誌に関する刊行補助金の申請について

平成13年度科研費補助金（定期刊行物）の申請について，臨時評議員会の決定に基づき，会長名による関連学会会長宛の挨拶文書を執行委員会において作成した上，11月14日付けで送付した．また，徳橋アイランドアーク誌編集事務局長と水野事務局長が協議しながら計画調書を作成し，11月28日に日本学術振興会に提出した．

7) 平成13年度「文部省研究成果公開発表（B)，(C)」の申請について

金沢大会準備委員会に連絡をとり，かつホームページに掲載して広報を行った．金沢大会準備委員会（田崎評議員）から申請が出され，執行委員会として検討の上，最終的な計画調書を12月8日までに提出する予定である．

公開発表（B）　連絡責任者：田崎和江「金沢フィールドスクール；見て，触って，手にとって体験地質学」平成13年10月7日（日）9時～16時　会場：金沢大学と金沢市郊外　経費：150万円．

## 2. 研究委員会報告

それぞれの関係委員からの次の報告が了承された．

**(1) 南極地質研究委員会**

白石和行委員（南極地質研究委員会幹事代行）から次の報告があった．

2000年10月1日（日）18：00–19：10，島根大学教養講義棟401号室において，第26回南極地質研究委員会を開催した（出席者27名）．また，10月11日16：00–18：00に国立極地研究所において，第27回委員会を開催した（出席者15名）．

議事1．第41次隊，夏隊の報告と越冬隊の現況

第41次隊の夏隊はみずほ基地ルート上の測線長約190 kmの人工地震実験に成功した．今期は地質の露岩調査は行われなかった．また，越冬中の下田，今栄，岩田の3隊員は10月27日から2001年1月27日までの3ヶ月間のやまと山脈への隕石探査旅行を実施する．（11月下旬現在やまと山脈で隕石探査を順調に実施中）

議事2．第26回SCAR総会の報告

極地研連と文部省・極地研が共催した．概要は地質学雑誌ニュース誌9月号に示した通り．

議事3．第Ⅵ期五ケ年計画と今後の地質研究計画について

南極観測統合推進本部の将来計画検討部会がまとめた南極観測の活動指針や，昨今のさまざまな情勢を反映して，第Ⅵ期観測計画に大きな改革がなされることになった．そのうち特に，第44次隊で計画されている「しらせ」の2往復計画は，地質の野外調査計画の大きな変更を迫るものであるため，松江大会後の10月11日にも第27回委員会を開催し，慎重に審議した．その結果，以下のことが了承された．

1) 44次夏隊での野外調査は昭和基地周辺のリュツォ・ホルム岩体で，調査期間は約3週間とする．

2) 具体的な研究計画は，参加候補者を決めたうえで，あらためて本委員会で検討する．

3) オブザーバとして第2陣（ケープタウン乗船，フリーマントル下船）のみの参加はありうるが，費用は自弁である（例えば科研費での参加も可能かもしれない）．ただし，この場合，昭和基地滞在はせいぜい10日であり，2月の天候を勘案すると，遠方への派遣は許されないため，野外調査には向かない．

4) 第46次に予定されている，エンダビーランドの調査計画は計画通り実施されるように，地学専門委員会に強く働きかける．

議事4．その他

この秋出発の第41次夏隊に参加する松田高明氏（姫路工大）から調査実施計画が示された．

**(2) ヒマラヤ地質研究委員会**

在田一則委員長より次の報告があった．

ヒマラヤ地質研究委員会メンバーが中心に

なって，ヒマラヤ・チベットの上昇と気候変動に対するその影響をテーマとした下記の研究集会を日本とネパールで開催した．

1. International Seminar on Himalayan and Tibetan Uplift and Global Climatic Changes.

   2000年9月29日，島根大学，主催：国際セミナー実行委員会，後援：日本地質学会，日本第四紀学会，日本構造地質研究会，口頭発表14件，参加者124名．

2. Workshop on Himalayan Uplift and Paleoclimatic Changes in Central Nepal.

   2000年11月10日，カトマンドゥ（ネパール），主催：文部省科研「ヒマラヤ山脈の上昇テクトニクスと気候変動」研究チーム（代表在田一則）」，文部省科研「ヒマヤ山脈の上昇とそれに伴う地球環境変動の研究」研究チーム（代表酒井治孝），トリブバン大学キルティプール校地質学教室，トリブバン大学トリチャンドラ校地質学教室およびネパール地質学会，口頭発表17件，参加者約100名．

**(3) 地質基準委員会**

新妻信明委員長より，地質基準委員会で作成の「第一次地質基準説明書」（共立出版刊）が2001年2月中旬に出版予定であり，ニュース誌に予約割引の広報中であるとの報告があった．

**(4) 地層名委員会**

天野一男委員長より次の報告があった．

「日本地質学会地層命名の指針」の英語版“Stratigraphic Guide of the Geological Society of Japan”を作成し，地質学会NewsのVol. 3, No. 10に印刷公表した．

“International Stratigraphic Guide”の邦訳については，原稿の最終的な調整に入り，出版社との間で出版に向けての打ち合わせを行っている．

**(5) 女性地球科学者の未来を考える研究委員会**

田崎和江委員長より次の報告があった．

島根大学での地質学会のおり，保育所の設定と補助をいただき，利用者および関係者一同，感謝申し上げる．保育所の世話人代表である木戸さん（海洋科学技術センター）もこのたび，地質学会に入会した．来年度の地質学会（金沢大学）の折りにも，会員に広く保育所の利用を呼びかけていく．3月下旬に研究交流会と巡検を行う．中央青年自然の家（御殿場）を宿に，1泊2日で火山や温泉の巡検をし，夜に交流会を持つ．現在，案内者と計画立案中．1998年の八甲田，1999年の中央構造線に続き，今回で3回目です．常に15-20名の老若男女の参加を得ている．スケジュール決定次第，ニュース誌で参加者の募集を行う．

各大学で，現在，教官の定員削減問題，任期制導入，男女共同参画推進のための任用計画について検討が始まっている．男性とともに女性科学者の未来は決して明るいものではない．任期制導入については99国立大学のうち，実施・検討が半分に達している．男女共同参画を推進すると，＜質が落ちる＞という暴言をはいた大学もある．これらの問題について，地質学会としても発言していく必要がある

地質学会の女性評議員は現在2名であるが，来年度は2割を目指したい．

**(6) 地学教育研究委員会**

佐瀬和義委員長より，本年の3学会セミナーは事情により延期となった，来年早い時期を目指して実施したい，との報告があった．

**(7) 研究企画委員会**

木村　学委員長より，前回の評議員会で討論された内容を踏まえた記事をニュース誌11月号に掲載した，意見を欲しい，来年度科研費に対して研究企画に関する課題を申請した，2001年3月30日に分科会の検討結果をまとめた公開討論会を開催の予定である，との報告があった．

**(8) 各賞問題検討委員会**

在田一則委員長より次の中間報告があり，これに対して，専門部会で賞を与えることを検討して欲しい，選考に際しては一般会員からの推薦も認めるようにして欲しいとの要望が出された．

1. 本委員会は1998年度各賞問題検討委員会（嶋本利彦委員長），1999年度各賞問題検討委員会（小川勇二郎委員長）の後を受けて，2000年度第2回　定例評議員会の決定に基づいた立石雅昭執行委員長の依頼を受けて，在田一則（委員長），赤羽貞幸，赤羽久忠，秋葉文雄，久保和也，斉藤尚人，田結庄良昭，湯浅真人の8名の委員と1名のオブザーバー（立石執行委員長）で7月に発足し，2000年度臨時評議員会で承認された．
2. 立石雅昭執行委員長から付託された本委員会の検討内容は以下のとおりである．

   「賞に関する意見は多様である．地質学会における賞のあり方，選考方法，財源などについて，具体的に当面可能な点を中心にとりまとめる．検討に際して，嶋本委員会報告は参考として扱う．なお，財源問題は会計委員会とやりとりしながら，まとめる．取りまとめ期間：金沢総会での承認を目標に，最終報告を2001年6月の評議員会に提出する．」
3. 本委員会は12月8日までに以下の2回の委員会を開催したほか，メイルによる意見交換を適宜行った．

   第1回委員会：2000年8月19日午後2時～5時（日本地質学会事務局）

   第2回委員会：2000年9月28日午後1時20分～3時（島根大学総合理工学部3号館3階セミナー室）
4. 本委員会では上記の諮問内容を考慮して，以下の検討課題を設定した．

   (1) 地質学会各賞の設置趣旨を再検討し，明確にする．

   (2) 各賞の財源を検討し，適当な成案を得る．

   (3) 各賞の選考方法を検討し，適当な成案を得る．

   (4) 以上の検討結果を踏まえた，新たな日本地質学会各賞選考規程（案）を作成する．

   (5) その他

これまでは，おもに(2)財源問題および(3)選考方法，について議論してきた．(2)財源問題については会計委員会での討論を参考にして以下の方向で議論しつつある．

＊各賞の授与は学会の目的を達成するための学会の基本的な活動の一つである．

＊地質学会の任意団体という形態あるいは現在の社会・経済情勢から，各賞に関る財源を寄付で作ることは困難である．

＊会計委員会報告のように，学会の支出項目として「顕彰費用引当準備金」を設定し，各賞に関る費用に充てる．しかし，寄付金受入の窓口（例えば，各賞基金口座）も設け，会員などから寄付を募る．

＊副賞（賞金）は研究奨励賞のみにする．賞金は現行の10万円から5万円に減額することも考える．

＊研究奨励賞，論文賞はそれに相応しいものには出来るだけ授与することが望ましい．

＊国際賞は資金的問題から数年に1回あるいは不定期な授賞になる．

その他の問題については審議中である．

**(9) 各賞選考委員会（議題へ）**

**(10) 移行措置等検討委員会**

徳岡委員長より，会則・運営細則改正に伴う移行措置は2001年の金沢総会を経て，その次の総会まで継続するものであり，移行措置等検討委員会はその間に問題が生じた都度，検討を進めていきたいとの報告があった．

**(11) 名誉会員推薦委員会**

徳岡副会長より委員会の構成について，会長・副会長・支部長のほか，4分野（階層）から選ばれた委員で構成することとなっており，3月の評議員会で報告できるよう，執行委員会で人選して欲しい，また委員会は会員歴の長い会員の顕彰の制度の検討を行うこととなっているとの報告があった．

## 3. 日本学術会議研究連絡委員会報告

それぞれの研究連絡委員会委員から次の報告があり，了承された．

**(1) 地質学研連**

公文富士夫研連委員より，12月12日に第1回研連が予定されているとの報告があった．

**(2) 鉱物学研連**

・石渡　明研連委員（第17期）から第17期第9回委員会（2000年6月23日）の議事録の送付があった（ニュース誌12月号に全文掲載）．

・高橋正樹研連委員（第18期）から第18期鉱物学研究連絡委第1回委員会（2000年11月24日）の内容が下記の通り報告

された．

日時：2000年11月24日（金）13：30～16：40

場所：日本学術会議第4部会会議室

参加者：青木，赤荻，井上，大谷，金田，高橋（正），豊，松井，松原，山中，吉田の11名

学術会議会員で研連担当の青木謙一郎氏の司会で自己紹介の後，委員長に山中高光氏，幹事に松井正典（書記）および赤荻正樹（渉外）の両氏が選出された．続いて青木謙一郎氏から今年度の学術会議の活動および第17期鉱物学研連についての報告があり，その後第18期鉱物学研連の課題を中心に以下のような報告および議論が行われた．

(1) 科学研究費問題：科学研究費審査員選出の制度が昨年度から変更となり，窓口研連で決定されることになった．昨年度は地質学総合研連がその窓口になっていたが，今年度は岩石・鉱物・鉱床については鉱物学研連が窓口となり審査員を決定することとなった．また，平成15年度から科学研究費の分科・細目が大幅に改正される予定であるが，これに対する対策を鉱物学研連として考えることが確認された．

(2) 学会連合問題：最近わが国の地球科学界では学会連合あるいは統合についての動きがみられるが，鉱物科学の分野としても連合ないし統合を視野に入れた独自の活動を行っていく必要があろうと意見が出された．

(3) 学会の統廃合問題：関連学会の統廃合ないしはリストラが今後問題となってくる可能性があるが，その際には鉱物学研連が指導的役割を果たす必要があるだろう．

(4) 国立大学独法化問題：これから予想される国立大学の独法化は鉱物科学のような基礎科学にとってその存立に係わるきわめて重要な問題であるが，1研連としての具体的な対応は難しいかもしれない．

(5) 国際鉱物学連合（IMA）大会：2006年IMA日本開催がすでに決定されており，現在鉱物学会，岩鉱学会，資源地質学会を中心として組織委員会作りが開始されており，会場予定地の第1候補としては東京が挙げられている．鉱物学研連はIMAの国際対応窓口となっているので，組織委員会等が軌道に載るまではこれを支援していく必要がある．今期研連では山中委員長をIMA日本代表として選出した．

(6) 研連再編成問題：来年からの省庁再編によって，学術会議はこれまでの総理府直属から総務省の管轄に変わる．こうした動きと連動して，現在総合科学技術会議で学術会議の在り方が抜本的に見直されようとしている．一方，第4部会では新たな研連を作るために現在既存の研連の見直しが進められており，理学では地球科学と生物学の両分野の研連の数が多いためその対象となっている．その場合，既存の研連の定員を減らして員数を放出するか，地質科学研連のような新たな統合研連を作るなどの方策が考えられている．

なお，第2回会合は2001年3月9日（金）13：30から学術会議で開催されることが予定されている．

(3) 鉱物学研連鉱床学専門委員会

丸山孝彦委員（第18期）より第18期第1回委員会に関する詳細な報告があり，評議員会終了後，同専門委員会の石渡幹事から次の公式報告が寄せられた（ニュース誌1月号に全文掲載予定）．

日時　平成12年11月22日（水）13：30～16：30

場所　日本学術会議6階第4部会会議室

出席者（五十音順）：青木謙一郎，石渡明，今井　亮（浦辺徹郎の代理），梶原良道（委員長），千葉　仁，根建心具，丸山孝彦，溝田忠人

欠席者：上野宏共

まず，青木会員から挨拶があり，委員長と幹事を互選した．

委員長：梶原良道　幹事：青木謙一郎・石渡　明

1. 報告

(1) 第18期第1回学術会議報告（青木）

席上配布された「日本学術会議，総会・部会報告」に基づき，青木会員より報告があった．

ア．7月26日～28日に第133回総会（第18期第1回），第4部会，各常置委員会，8月24日に第4部会，9月28日に連合部会と第4部会，10月30日～11月2日に第134回総会（第18期第2回），連合部会，第4部会，各種委員会が開催された．

イ．日本学術会議第18期役員

会長　吉川弘之（第5部）　副会長　吉田民人（第1部）　副会長　黒川清（第7部）

ウ．第4部会第18期役員

部長　大滝仁志（立命館，化学）　副部長　土井範久（慶應，情報）　幹事　岩槻邦男（放送大，植物）　幹事　郷信広（京大，物理）

エ．関連研究連絡委員会・専門委員会の定数と世話人（会員）

| | | |
|---|---|---|
| 地質学研連 | 15名 | 齋藤常正 |
| 鉱物学研連 | 12名 | 青木謙一郎 |
| 鉱床学専門委 | 9名 | 青木謙一郎 |
| 地質科学総合研連 | 9名 | 米倉伸之 |
| 古生物学研連 | 12名 | 齋藤常正 |
| 第四紀研連 | 13名 | 米倉伸之 |
| 地球化学・宇宙化学研連 | 12名 | 青木謙一郎 |

オ．第18期活動計画（A4判16ページの冊子）が席上配布された．

目玉は，(1)人類的課題解決のための日本の計画（JAPAN PERSPECTIVE）の提案，(2)学術の状況並びに学術と社会との関係に依拠する新しい学術体系の提案，である．

カ．常置委員会（6個）と臨時（特別）委員会（7個）が設置された．

常置：(1)組織・制度，(2)学術と社会，(3)学術の在り方，(4)学術体制，(5)学術基盤情報，(6)国際協力．

特別：(1)価値観の転換と新しいライフスタイル，(2)ジェンダー問題の多角的検討，(3)ヒューマン・セキュリティの構築，(4)情報技術革新と経済・社会，(5)循環型社会，(6)生命科学の全体像と生命倫理，(7)教育体系の再構築．

キ．会則一部改正（案）について　4つの研連を廃止し，新たに4つの研連を作る．

ク．第4部会で科学研究費の窓口研連・対応研連の変更が承認された．細目「岩石・鉱物・鉱床」の窓口研連は鉱物研連，対応研連は地質科学総合研連となった．

ケ．「研連の見直し」と「理学の振興」について，ワーキンググループを第4部に設置して検討することになった．

コ．平成14年度科学研究費補助金審査委員の推薦に関する作業日程及び方法について説明があり，若干の質疑があった．科研費の申請・採択状況についての説明があり，関連地学分野では，細目「岩石・鉱物・鉱床」の申請件数が約200件と最大であることが報告された．

2. 審議事項

(1) 科研費の分科・細目の再編について（梶原）

ア．本年8月頃から新しい学術体系を目指して，科学研究費補助金の「部・分科・細目」（現在の階層区分）の統廃合が学術審議会の主導で検討されている（文部省学術審議会科研費分科細目検討委員会）．

理学系の世話人は2人であり，この下にワーキンググループが組織され，地球科学系からは2人が入っている．その1人である本専門委員会の梶原委員長から，「第1回分科細目改正検討委員会」による　「分科細目改正に当たっての基本的枠組み（素案）」が示され，この素案に関する議論が行われた．また，専門委員会では大幅の変更には賛成しがたく，現在施行されている分科・細目をできれば継続していただきたいとの意見が多かった．2001年6月頃に改正案が固まる見込みである．

(2) その他

ア．一部の委員から，鉱床学分野も含む理学部の研究者は，もっと特許取得に関心を持ち，自分たちの研究を特許化するコーディネーターなどの仕組み（TLOなど）を充実して研究内容を社会にアピールすべきであり，そうしないと正当な評価がなされ難いという意見があった．

イ．一部の委員から，第17期の対外報告では非金属資源，特にエネルギー資源に触れられていなかったので，第18期では社会にアピールするエネルギー資源研究の振興について対外報告を出したらどうかという意見があった．

ウ．第18期では鉱床学の振興と教育の普及を目指す日本学術会議主催（または共催）のシンポジウムを行ってほしいという，第17期からの申し送り事項が伝えられた．

エ．本専門委員会は年3回開催予定であるが，内1回は鉱物研連と合同で開催する予定である．

オ．次回の本専門委員会は平成13年3月上旬に開催することとした．

**(4) 地球化学・宇宙化学研連**

田中　剛研連委員（第17期）から第17期第9回委員会（2000年8月31日）の議事要録の送付があった（ニュース誌12月号に全文掲載）．

田結庄良昭研連委員（第18期）から第18期地球化学・宇宙化学研究連絡委員会（第1回）の議事内容が下記のとおり報告された（議事録は本誌に掲載）．

日時：2000年11月16日(木)13:30～16:50

場所：日本学術会議第4部会室

参加者：青木，留岡，中村，田中，日下部，松田，海老原，清水，中澤，藤原，下山，田結庄の12名

学術会議会員でこの研連担当の青木謙一郎氏の司会で自己紹介の後，本研連の委員長に田中　剛氏，幹事に海老原　充氏，清水　洋氏を選出した．続いて青木謙一郎氏から第17期の学術会議総会報告がこの研連に関することを中心に報告された．

第17期からの申し送りとして，研連の見直しと検討委員会の設置，研連の統合と新研連（新分野）

設置の提案などについて審議がなされた．この中で地球科学研連は11もあり，細分化されているので，統合するように進められている．しかし，現状ではそれぞれの研連の特性もあり，統合は難しいことが話し合われた．

・科学研究費審査委員候補者の推薦について

科研費審査委員の候補者の推薦にあたり，窓口研連として，学振に対して，分科「地球科学」の第2審査委員候補者の一部（化学関連），細目「地球化学」の第2審査委員候補者全員の推薦を行うが，具体的な推薦にあたっては18学協会に候補者の推薦を依頼して行う．現行の方法は幾分煩雑であるが，公正さ，公開性の点で，多くの学協会の支持を得ていることが報告された．今回もこの現行の方法で推薦を考えており，平成13年2月各学会あてに，候補者の推薦をお願いする．3月にリスト送付のスケジュールが話し合われた．田中委員長から科研費の審査委員を選ぶことが最も重要な役目であることが報告された．

・IAGCとの対応強化

本研連は，対外的にはIAGCの国内対応団体として機能している．今年のIAGC総会では国会委員を廃して個人会員のみにする約款の改正が行われる．そこでIAGCとの新たな連携を急いで考えていきたい．なお，雑談で，日本で行われる関連国際会議，ハットンシンポジウム，エクロガイトシンポジウムなど参加者が重なることが予想され，会議を整理する必要があるのではと話し合われた．なお，平成13年度の国際会議代表派遣要求で，海老原　充氏を推薦した．

・流動化する研究環境の中で新たな将来計画の策定

大学，研究所の再編の中で，将来構想を議論し，方向性を出すべく，討論を行った．今回は環境分野と地球化学分野の関係が話し合われた．必ずしも学問的なことからでなく，行政的な依頼からきているケースが多いことが話し合われた．今後，研究環境の激変に対応した将来構想を検討することが重要であり，それぞれの出身分野の情報を持ち寄ることが話し合われた．（文責，田結庄良昭）

**(5) 海洋科学研連**

井内美郎研連委員（第18期）から第1回研連に関する次の報告があった．

日時：平成12年11月7日（火）13時30分～17時

出席者：西田篤弘，斎藤常正，谷口　旭，山口征矢，西田周平，松山優治，寺崎誠，石井春雄，角皆静男，平　啓介，伊藤絹子，松田　治，野崎義行，伏見克彦，花輪公雄，前田明夫，友定　彰，瀬岡和夫，古谷　研，井内美郎

場所：日本学術会議

Ⅰ．第18期海洋科学研究連絡委員会発足にあたって

1．第18期研連発足世話人・西田篤弘第4部会員の挨拶の後，18期委員長として谷口旭第6部会員を選出した．

2．谷口新委員長の挨拶，出席委員の自己紹介の後，次の5幹事を選出した．西田周平（生物系），伏見克彦（化学系），松山優治（物理系），伊藤絹子（水産），井内美郎（地学系）．

3．海洋科学技術センターからオブザーバーを招請する事について角皆委員より提案があり，これを了承した．

4．17期研連幹事であった花輪委員より，第17期からの申し送り事項3項目について説明があり，第18期研連はこれを引き継ぐこととした．併せて第17期第9回委員会の議事録が朗読され了承された．

Ⅱ．報告事項

1．海洋研究科学委員会（SCOR）

SCOR副会長である角皆委員より，第25回総会の報告があった．主な項目はSOLASが実施に向けて動きだしたこと，JGOFS後継の検討が始まること，2002年に開かれる次回のSCOR総会開催地が日本に決定したことなどである．

2．学術会議第134回総会

同総会および関連情報について谷口委員長より報告があった．骨子は以下の通り．総会では第18期の活動計画として，(1)人類的課題解決のための日本の計画（Japan Perspective），および(2)学術の状況並びに学術と社会との関係に依拠する新しい学術体系の提案，の2項目を骨格とする計画が採択されたこと，この項目から想像できるように，学術の体系や文部省科研費の部分科細目編成などに革新的な変化が起こるかも知れず，また，海洋科学などのように現在は複合領域というあいまいなカテゴリーに押し込められている分野に対する認識が改まることも期待できる．

Ⅲ．協議事項

1．国際学術交流事業平成13（2001）年度代表派遣候補者について

選出に先立ち，SCOR国内委員を平　啓介（物理），角皆静男（化学），谷口　旭（生物）とすることとし，派遣候補者には，SCOR副会長である角皆委員にはSCORから旅費が支給されることを見越して，谷口委員と角皆委員をこの順位で推薦することとした．

2．2002年SCORE総会開催準備について

次回のSCORE総会が日本で開催される際の主催団体は海洋科学研連になるので，上記3名の国内委員が相談してその準備作業案を作ることとなった．

3．第18期の海洋科学研連の活動方針について

17期から引き継いだ3項目にSCORE総会の開催を加え，次の4項目を第18期の活動方針とすることが決定された．

(1) 海洋科学の教育と研究の振興について引き続き審議する．

(2) 「海洋科学研究・教育のための船舶運営機構に関する検討小委員会（略称：練習船小委）」を継続設置し，今期中に「海洋教育研究のための船舶不足と水産系大学練習船の今後について（仮題）」の対外報告を取りまとめる．

(3) SCORの第26回総会を平成14年秋に日本において開催する．

(4) 文部省科学研究費補助金複合域細目「環境保全」の審査員候補推薦作業のルールを作る．なお，練習船小委員会委員長については，平成13（2001年）年3月末までは花輪委員にお願いし，その後，松山委員にお願いすることになった．

4. 東京大学海洋研究所共同利用施設運営委員会委員の推薦について

平成13・14（2001–2003）年度の委員として，山口征矢氏（水産学），田上英一郎氏（化学），松野　健氏（物理），岡田尚武氏（地学），古谷　研氏（生物）の5名を推薦することとした．

次回は3月6日に開催の予定（議事録作成・伊藤絹子）

**(6) 国際学術協力事業研連**

土　隆一研連幹事より，「国際協力常置委員会からの依頼により，「国際学術団体及び国際学術協力事業―2000年報告書」の原稿を12月初旬までに完了すべく現在執筆中」との報告があった．

**(7) 古生物学研連**

八尾　昭研連委員から，第18期第1回の委員会に関する次の報告があった．

日時：2000年11月22日(水)13：30～17：00

場所：日本学術会議　第6部会議室

出席：斎藤常正会員，野田浩司，小泉　格，長谷川善和，小笠原憲四郎，八尾　昭，西田治文，北里　洋，大路樹生（欠席：加瀬友喜，瀬戸口烈司，辻誠一郎）

議事

1. 委員長および幹事の選出：委員長に野田浩司，幹事に北里　洋，大路樹生が選出された．
2. 学術会議，研連の役割：

斎藤委員より，学術会議・研連の役割，仕組みについて説明があった．特に学術会議第18期では，(1)人類的課題解決のための日本の計画（JAPAN PERSPECTIVE）の提案，(2)学術の状況並びに学術と社会との関係に依拠する新しい学術体系の提案，の2つの課題に取り組むことが唱われている．また，来年4月から行われる情報公開法への対処，国際学術集会への代表派遣の推薦，科研費審査委員候補者推薦の日程などが紹介された．

3. 第17期からの申し送り事項，第18期の委員会活動について：
   1) 第18期は，日本生態学会の代わりに日本第四紀学会から2名の委員を推薦してもらうことになった．
   2) 古生物模式標本類データベースについて；小笠原委員より進行状況が紹介され，今後の方針が話し合われた．現在約1,000ページ分の原稿があり，これを第1期分として出版し，今後集まると予定される原稿（巻貝，植物などを含む）を第2期として出版したい旨が報告された．まずハードコピーを出版し，その後時期をみてウェブでオンラインを通した利用を図る予定である．今後，出版の資金計画，原稿の体裁，編集・出版の責任者，発行者などの案を日本古生物学会模式標本データベース小委員会と連携して詰め，次回の委員会で出版に向けた最終判断を仰ぐことにした．
   3) 地方博物館等の関係者で，特に博士の学位取得者に科研費申請権利を与えるような制度の改善要求について；現行の地方博物館で科研費申請ができる研究機関認定のされているものがどの位あるのか，現状を把握することになった．幹事が西田委員，または自然史学会連合の森脇代表と連絡を取りながら次データを整える．
   4) 「大所高所」の立場から，我が国の古生物学全般に関する議論を行い，具体的提言を行っていく任務・役割の再確認；この件に関し，古生物学の将来性，新しい世代に訴えかけるテーマ，他分野に対して古生物学から積極的に発信する必要性などが議論された．また，タイプ標本を国内の機関がどのように扱って行くべきかに関する問題点，また各機関の間で不統一なデータベースの規格の共有化の課題などが紹介された．
4. その他：議事録は幹事が作成し，全委員に案を回覧し点検を受けた後，事務局に提出する．

次回は3月9日（金）13：30～の予定．

**(8) IGCP専門委員会**

土　隆一委員長から次の報告があった．

1. 日本IGCPの活動報告として"Earth's Environment of the IGCP Activities for the 21st Century", 76p.を刊行し，本年8月にブラジルで開かれた第31回IGCにおけるIGCP特別シンポジウムならびに関係方面に280部を配布した．
2. 平成12年9月12日，本年第3回の委員会が日本学術会議で開かれ，新しいIGCPプロジェクトとして小笠原憲四郎氏（筑波大）から"Cenozoic Paleoenvironmental Effects in the Pacific Ocean Related to Pacific Ocean Gateways"の提案があり，討議の結果，IGCP本部に推薦することとした．
3. 本年度のIGCP特別シンポジウムとして，IGCP-425"文化遺産と地すべり災害予測"に関連して，来る2001年1月15日～19日に日本学術会議においてユネスコと共に国際シンポジウムを開催する予定である．

## 5. 各種委員会報告

下記のそれぞれの報告について了承された．

**(1) The Island Arc編集委員会**

徳橋編集事務局長より次の報告があった．

1. 出版状況　Vol. 9, Issue 3まで出版済み
2. 2000年編集状況（11月27日現在）

投稿総数：54　受理：34（内，特集号関係：29）　リジェクト：6　査読中：13　その他：1

3. トピックス：

今年初めてISIのJournal Citation Report（JCR）で公表されたThe Island Arcの Impact Factor（1999年Impact Factor）が，1.0というかなり高い値であることが出版社からの連絡で明らかになった．これはひとえに編集委員会，出版社を初めとする関係者の長年の努力のたまものと考えられる．なお，このImpact Factorについては，その算出法を初めとする解説記事が，地質学会ニュース誌11月号のアイランドアーク便りに掲載されているので参照されたい．

**(2) JABEE検討ワーキンググループ**

公文第一庶務委員長より三宅康幸委員長からの次の報告が紹介された．

・地質工学分野の提案準備

2000年6月22日にJABEE第3回事務局連絡会が開催され，水野事務局長が出席した．その際に，7月7日以前に基準・審査委員会のワーキンググループでの追加分野の検討のために，「分野」と成り得るかどうかに関する資料（関係するプログラム数，教育内容）を提出して欲しいとの要請があった．それを受けて，三宅委員長（地質学会WG），千木良委員長（応用地質学会WG）が中心となって，意見交換，資料収集をしながら，提出資料の詰めが行われていった．

・地質工学分野の提案

7月3日，応用地質学会のW.G，地質学会の三宅W.G.委員長と公文第一庶務委員長，地下水学会代表の三者が集まり，JABEE「地質工学関連分野」の意見交換会が持たれた．なお，応用地質学会長と同総務委員長が同席された．各学会の取り組みの状況を交換した後，応用地質学会W.G.千木良委員長を中心にまとめられきた分野別審査基準案について議論し，多少の手直しを経て，成案を得た．これと，当分野に該当する学科数の資料などとともに7月5日に千木良委員長より，JABEE事務局に対して，3学会の共同提案として「地質工学および関連分野」の分野別基準案（教育内容など），プログラムを提出した．その内容は以下のとおりである．

[地質工学および関連分野]

この基準は，地質工学および地質工学に関連する分野の技術者教育プログラムに適用される．

1. 教育内容

本プログラムの修了生は，以下の能力・技術を身につけている必要がある．

(1) 基礎能力

a) 微分方程式及び線形代数を含む数学，微積分に基礎をおく物理学，一般化学の基礎能力

b) 地質工学に関する専門知識および技術に基づいて，調査・実験計画を立案・遂行し，データを正確に解析し，課題を探究して解決する能力．および，この過程を明確に説明する能力

c) 地質工学技術者が経験する次のような実務上の問題点と課題を整理し，適

切に対応する基礎的能力
・持続可能な開発と環境（地球環境，地域環境及び環境負荷の低減）
・防災及び安全の確保
・環境の修復

(2) 地質工学の知識・能力

a) 地質学と地球物理学のトピックと基礎的な原理・地層の成因・地質調査の諸方法を理解して，鉱物や岩石の裸眼と顕微鏡下での同定と地質図の三次元的な表現に習熟していること．

b) 地圏における元素の化学的挙動・資源の成因・第四紀の環境変動・地形変化の成因・火山活動の種類と原動力のうち2つ以上について理解し，人間の実生活と関わる環境問題に関する地質学的問題を明示し解決する能力を示すこと．

c) 岩盤の力学的性質・土の特性と力学的性質・物理的手法や衛星データによる地盤の地下構造探査や変動の検知の原理・建設に関連する地盤の特性や強度・地盤の中の水の動きや性質・自然災害や地盤汚染への対応・岩石にかかる応力と歪みや変形などのうち3つを含む知識を有し，地質工学的問題を解決してみせる能力を有すること．

2. 教員（教授，助教授，講師）

(1) 大多数の教員は，理学あるいは工学に関連する学位（博士号）を有するとともに，教育経験・実務経験によって科目を教える資格があること

(2) 教員団には，技術者資格を有しているか，またはカリキュラムに関わる実務経験によって科目を教える資格のある教員を含むことができる

・学会・研連からの要請

7月10日付けで地質科学の学術会議3会員連名による学術会議会長（＝JABEE会長）宛の，「地質工学分野」設立に関する検討依頼書が提出された．また，研連サイドの岩松氏と水野事務局長の協議の上，WGとも計って文章を作成し，7月18日あらためて3学会長名による「地質工学分野」設立に関する要望書をJABEE会長宛に付けで送付した．それに対し，7月27日付けで3会長に対する返書がJABEE会長名で送付された．

・地質工学分野に関するJABEEの検討結果

「地質工学分野」については，7月7日のJABEE第2回分野WGで審議され，「資源分野の応用地球科学の中で扱われる分野であり，将来合体する方向で議論していく．土木・環境との関係についても調整が必要．農学部の中にも生物資源科学科など関連がある」とされた．なお，口頭で，キーワードが土木・資源・環境分野と重なっている，土木・資源と話し合って欲しい，少なくともスタートの段階で「分野」とすることはやめておくこととした，と説明があった．7月21日のJABEE第3回分野（拡大）WG会議があり，拡大分野についてのヒアリングが行われたが，「地質工学分野」はその対象とならなかった．7月30日にJABEE基準・審査委員会が行われ，上記WGからの「地質工学は土木・資源素材分野と話し合いと調整をすすめる」との報告が了承された．その時点で決定されている分野は次の12．化学系，機械系，材料系，情報系，電気・電子・情報通信系，土木系，資源系，建築系，農業工学系，農学一般，経営工学系，工学一般（応用物理学会・日本工学教育協会で検討中）．他の分野は，なるべく既存の分野に入れるよう検討し，最後は全分野で認定可能とするとされている．

・資源素材学会との話し合い

9月11日，資源素材学会JABEE委員会と，応用地質学会・地質学会のWGとの意見交換が行われた．

この意見交換は，日本応用地質学会，日本地質学会,日本地下水学会，3学会で7月にJABEEに提案した「地質工学および地質工学関連分野」分野別基準案に対する吉川会長の返答（資源素材関連と土木関連分野との調整を要求）を受けて行ったものである．

資源素材学会の大和田教授から，地質工学単独での分野を立ち上げるのは困難であること，資源および資源関連分野では地質工学関連と合流することを歓迎すること，その場合，分野の名称と内容について再検討する準備があることの説明がなされた．そして，地質工学関連分野の3学会が賛同するならば,資源素材学会の委員会「資源系技術者資格問題と技術者教育問題に関する調査研究委員会」（大和田委員長）に3学会から委員が参加し，ここで分野の名称や内容について検討してはどうかという提案がされた．

9月中に，この方向での調整の可否と上記委員会への参加の有無について，各学会の意見をまとめて回答することになった．

・地質学会第107年年会（松江）夜間小集会「JABEEと21世紀の地質学」の結果

9月30日夕刻6時から，表記夜間小集会が開かれた．参加者は，大学（15校）教員18名・学生3名，研究所3名，企業4名，学会事務局1名，総計29名で，時間を大幅に超過して9時半まで内容の濃い討論が交わされた．

JABEE事務局に地質学会・応用地質学会・地下水学会の3学会が提出した「地質工学」分野の立ち上げが認められなかった状況下で，資源分野との合同の是非をめぐってさまざまな報告と発言があいついだ．

この問題をめぐっては，資源分野と合同する案に対して，あくまで「地質工学」を主張する，あるいは技術士と同様の「応用理学」に類するものを提案し，その中で地質工学の分野を確保するという提案もなされ，さまざまな立場からメリット・デメリットの検討がなされた．その結果，新たな分野をたてることは困難であるという認識で一致した．その理由は，JABEEが分野の数を少なく押さえる，すなわち，将来の学生が活躍する場を広げるためには分野を細分しないほうが良い，に対抗して新たな分野の創立を主張することが，JABEE側で学会のエゴと受け取られているきらいがあること．すでに立ち上がっている資源分野と，我々の「地質工学」分野では多くのキーワードが重複していること，などである．

その上で，地質工学と資源分野との合同にあたり，地質学会の基本姿勢について議論された．その結論は以下のようなものであった．

1) 分野名が重要である．「地質工学」の専門家であることを和文・英文で表現できなければたとえば仕事を受注する際などに不利になる．

2) 将来，地質・環境・水に関連したできるだけ広い分野を含みうるような構えが必要である．

3) 「地質工学」で作成された分野別基準が「資源」と合同した新たな分野の中の一部分において継続されるようにする．

4) 現在の地質工学分野が将来どのように変化するかについて，ある程度地質学会として見通しをもって基準を作っていく必要がある．そのために業界と大学の交流の場をもつ．

5) 4）の一方では，大学の将来のカリキュラムをJABEEの基準が強く規定するということはしない．各大学が強固な理念のもと特色あるプログラムを作成し，社会との相互作用の中で自己改革していくことが基本であり，分野別基準は，大学側の広い自由度を認めるものであって良い．

・現時点での動向

資源素材学会との話し合いはその後あまり進展していない．資源分野の試行審査が一段落したあと（12月以降）に議論を進めたいという，資源素材学会からの申し入れがあった．

## 6. 関連外部委員会報告

それぞれ，関係委員からの下記の報告が了承された．

### (1) 学校科目「地学」関連学会協議会

佐瀬和義委員より，次回協議会が12月13日に予定されているとの報告があった．

### (2) 自然史学会連合

森田利仁委員より下記の「自然史学会連合2000年度活動中間報告」があった．

去る10月14日，自然史学会連合の総会があり，昨年度の会計報告，今年度の会計中間報告，来年度の予算案，今年度の活動報告があった．出席者の全会一致で承認された．主な事項は下記のとおり．

・予算について

1999年度予算決算報告

2000年度執行状況報告
2001年度予算案…地域博物館アクションプランに旅費として増額しておくべきとの案が出て，承認を得た．

・活動内容について
地域博物館アクションプラン…現在，地域博物館研究者に科研費申請の道を開くべく，地域博物館の現状に関して，アンケート調査中．今後，科研費申請枠を広げる上での問題点を解析し，広く報告していく予定でである．また，地域博物館同士の連絡会議を設置する予定でである．
ホームページ編集委員会…連合のホームページが稼動をはじた．森田，遠藤，西田，篠原の運営委員を中心に，しばらく編集委員会体制を整備していく．ホームページへの情報掲載のご要望など広く待っている．
地域教育プラン（仮称）…自然史教育を，地域を舞台に進めるべく組織つくりを開始する．まだ形はないが，まったく新しい連合の運動として取り組みたいと考えている．文部省・自治体などの社会教育ネットワークとの有効な連携を図る．
自然史研究機関立案アクションプラン…連合が掲げた最初の目標として，今後も運営委員を中心に学術会議・文部省などへ働きかけ，可能性を追い求める予定．

・来年度のシンポジウム
来年度のシンポジウムの企画にあたり，各学協会からの積極的な起案を募る．また科研費公開促進費など，財源確保の意志があれば，もちろん大いに歓迎する．事務局までご連絡いただきたい．

・そのほか
馬場悠男運営委員より，企業や自治体などが自然史に投資するようになってきているので，そのチャンスを連合としても積極的に活かしていくべきではないか，との意見が出された．連合は引き続きそのような好機を積極的にとらえて，自然史の発展のために尽力していく．具体的な財源獲得や運動戦略が作れる好機をとらえたならば，執行部から皆さんにご相談する．

・自然史シンポジウムの報告：
総会の日の午後より今年のシンポジウムが開かれた．5つの演題を中心に，自然史に関する画像データベースの議論が沸きあがった．参加者は90名．

・学協会の分担金について
毎年の分担金について，連合会計より各学協会の連合代表の皆さんへ，お支払いの依頼を差し上げている．

**(3) 地球環境科学関連学会協議会**

新妻信明委員より，その後開催されていないとの報告があった．

**(4) 地質科学関連学協会連合（地質科学連合）**

公文第一庶務委員長より，地質科学連合の幹事会において作成された下記の規約案について関連学協会の承認が求められ，執行委員会としては，とくに問題がないので承認することとした．本評議員会においてこのことを了承して欲しいと述べられ，異議なく了承された．

＜地質科学関連学協会連合(地質科学連合)規約（案)＞

[1] 地質科学関連学協会連合（以下連合という）は，地質科学及びその関連分野の普及・振興に資するために協力して活動することを目的とする．

[2] この連合は地質科学及びそれに関連する分野の（全国規模の）学術団体により構成される．日本学術会議の登録団体は参加の意志を表明すれば自動的に加入することができる．それ以外の学術団体の場合は，（幹事会/評議会）の議による．脱退の場合はその意志の表明をすればよい．

[3] 連合に関する重要事項を協議するため，各学協会の代表1名で構成される評議会を置く．評議会は協議機関で，連合の規約に関する問題，活動方針や具体的活動に関する問題などについて意見の交換と集約を行う．また，幹事学協会の指名などを行う．

[4] 加盟学協会のうちからいくつかの学協会を指名して幹事学協会とし，幹事学協会の合議により連合の通常の運営をおこなう．幹事学協会の任期は2年とする．

[5] 連合の活動に要する経費は，分担金，補助金，寄付金などによる．分担金は別に定める．

## 議　題

**1. 各賞選考の進め方について**

立石執行委員長より総会開催時期の変更に伴い，2000年度以降の各賞の選考について従来の方式を一部変更したいとの提案があり，討論の結果，原案が一部修正の上，承認され，次のように取り扱うこととなった（第1の項目については追認）．

(1) 論文賞・奨励賞の推薦締め切り（2000年6月号までの分）を1ヶ月延期して，12月8日とした．

(2) 2001年秋の総会での授賞対象論文には，2000年7月号から12月号分までを加える（本評議員会後に現選考委員会が選考する）．

(3) 2002年秋の総会での授賞論文は，1999年7月号から2001年12月号分とする（次期選考委員会が選考する）．

(4) 以降は，2年分を対象とする．

なお，2001年秋の総会での表彰に向けて，上記の(1)，(2)を合わせて2001年6月の定例評議員会で選考の決定を行うこととした．

**2. 「地質環境の長期安定性に関する研究委員会」の設置について**

立石執行委員長より表記に関し，松江大会時の臨時評議員会の前に提案があり，その後，執行委員会と提案者との間で協議され，あらためて提案が今回行われた経緯が説明された後，渡辺評議員（提案者代表）より提案内容の説明があり，多数の質疑応答・討論の上，下記内容で委員会を設置することが承認された．なお，議論が集中したのは，地質学会としての社会的対応の必要性，環境地質研究委員会の活動との関連性であった．

設置理由：先の通常国会で「特定放射性廃棄物の最終処分に関する法律」が成立し，国の原子力政策への賛否とは別に，高レベル放射性廃棄物の処理方法を考えることはわれわれにとってとりわけ重要な責任となる．各種の機関・個人の研究成果を集約・整理し，学術団体として地質環境の長期安定性に関する基本的課題を明らかにし，社会に正確な情報を流すことを目的とする．

研究委員会の性格：地質環境の長期安定性についての基本的課題を明らかにし，判断基準についての地質学的研究の現状を明示することが課題であり，未解明の問題を明らかにするとともに，研究課題の提起をも展望する．行政の行う政策に対して賛否の判断は委員会としては行わない．重要な役割の一つは，検討の成果をもとに日本の地質の安定性に関して，広く国民に知らせることである．

期間：今後10～20年は必要と思われるが，第一次研究委員会の期間を3年とする．

活動方法：インターネットを活用し，資料収集，委員間の意見交換を日常的に行う．ニュース誌に関連記事を掲載して学会内に情報を流す．第一次研究委員会の報告書を地質学論集などの形で出版するよう努力する．毎年，委員会の意見を集約してその結果を社会的に公表することを目指し，また多数決による採決は行わない．

研究委員の構成：評議員会の推薦するメンバー10名程度．その他，環境地質，高レベル放射性廃棄物，構造地質学の研究に携わっている研究者10名以内（岩石部会・火山部会・環境地質研究委員会・構造地質研究会に推薦を御願いする．地質学会会員外も含む）．ここに北海道，東北，関東，中部，近畿，中国，四国，九州・沖縄の各地方のメンバーが含まれていない場合は，各地域から1名を選出．委員会には多様な意見が反映されるよう構成を検討する．

研究経費：別途，独自財源，出版経費を検討する．科研費，環境問題の研究助成も検討する．

**3. 財政再建への方策について**

佐々木会計委員長より松江大会時の臨時評議員会における報告・説明内容に基づいてさらに検討を加えた結果として，財政再建の具体的方策について大要下記の提案があり，討論の上，とくに2001年度から導入したい各

事項について原案通り承認された（提案の全文については別途ニュース誌（2001年1月号に掲載）.

1. 2001年度（2001年1月1日）より導入したい具体策
   1) 地質学雑誌の別刷りの有料化，ただし，学生会員と院生割引き適用の正会員については50部まで無料とする．論集については，別刷りを作成しないこととする．
   2) 会費未納会員の学会誌への投稿，年会などでの発表の制限：会員が投稿・発表の際には会費納入済みであることを自己申告し，未納入の場合には直ちに会費納入のルールとする．論集等の学会印刷物の購入も非会員価格とする．
   3) 独立採算性における年会での普及活動の経費支出
   4) 年会の会計処理：これまで開催校でクローズしていた会計処理を本会処理とする．ただし，年会の巡検と懇親会費は当面本会会計には入れず，完全な独立採算とする．
   5) 必要な特定引当金の新設とその処理
      a) 普及出版活動に対する引当金の新設
      b) 年会開催補助に対する引当金の新設
      c) 研究奨励費に対する引当金の新設
      d) 退職金外部積立に対する引当金の新設（現在の退職金引当金を内部留保の現行引当金と，外部積立の引当金に分ける）
   6) 学会誌・ニュース誌印刷業務の競争入札制度の継続
2. 検討を継続したい具体策
   1) 地質学雑誌の印刷負担金
   2) ニュース誌の印刷負担金（明らかに受益者負担制度を適用しなければならないと編集委員会あるいは執行委員会が判断したものに限り印刷負担金を御願いする）
   3) 年会講演における発表登録料
   4) 学会誌版下の著者作成

**4. 2000年度会計決算案（暫定）と2001年度予算案（暫定）について**

佐々木会計委員長より，表記に関する提案があり，異議なく承認された．なお，2000年度支出，2001年度の収支には，承認された前記の諸事項が含まれている．

なお，両年度の収支決算額（暫定）は下記の通りである．

| | |
|---|---|
| 2000年度収入合計 | 99,370,000円 |
| 支出合計 | 99,370,000円 |
| 2001年度収入合計 | 94,260,000円 |
| 支出合計 | 94,260,000円 |

**5. 定期刊行物検討ワーキンググループ答申の［提案2］について**

立石執行委員長より，執行委員会の結論として，とりあえず平副会長を委員長とする刊行物検討委員会を評議員会のもとに設置し，今後地質学雑誌とThe Island Arc誌を学会刊行物としてどのようにしていくかを検討してもらうこと，また委員には徳橋・小川・荒戸・磯崎・向山会員に依頼したいと提案された．これに対し，質疑応答の後，承認された．なお，一評議員から，教師層からも委員を加えて欲しい旨の要望が出され，今後の委員の追加については平委員長の判断に任されることになった．

**6. 第109年総会・年会（2002年秋）の開催地について**

伊藤行事委員長より，現在未定であり，執行委員会で検討の結果，これまでの開催校の歴史から見て，静岡（1970），千葉（1972），京都（1975），高知（1977），秋田（1979）［（　）はそれぞれでの前回の開催年］の順で打診したいとの提案があり，承認された．

**7. その他**

**(1) 継続教育問題検討ワーキンググループの設置について**

公文第一庶務委員長より，地質工学分野における継続教育に関わる5学協会の協議についての報告と，継続教育ワーキンググループ設立に関して下記の報告があり，質疑・討論の上，異議なく了承された．

1) 地質工学分野における継続教育（CPD）に関わる5学協会の協議について

日時・場所：2000年12月8日10：00～12：00　応用地質学会事務所

出席者：応用地質学会　三谷総務委員長，中川継続教育委員会委員長，中島；地質学会　公文；日本地下水学会　長瀬；物理探査学会　本荘，麓；全地連　藤城

技術者の継続教育を取り巻く環境の現状ついて，2000年4月における技術士法の改正と2001年4月からの施行，APECエンジニア制度への登録開始（2000/12/20）などにより，技術士（者）の継続教育が不可欠となっている状況が中川氏から説明された．その継続教育のノルマは50時間（単位)/年（150時間/3年間）である．継続教育として評価される形態（カテゴリー）とその「評価単価」についての試案も示されたが，学会等が専門性の高い継続教育を組織的に行わなければならない状況であることも判明した．また，評価基準の統一を目指した日本PDE協議会の設立が準備されたり，日本工学会で日本技術者生涯教育委員会での議論がなされたりしている状況が報告された．

この課題についての各学協会における対応の進行度はまちまちであるが，学会の枠を越えて共同して継続教育に取り組む必要があることで意見が一致した．それを受けて，継続教育問題についての協議と調整の場として「地質工学分野における技術者教育推進協議会（仮称）」を設置することをそれぞれの学会に諮ること，および，協議の場に参加する委員の選出することを求められた．次の協議の場は2月半ばが予定されている．

2) 継続教育ワーキンググループ設立の提案

地質学会としてはこの問題に対応するために執行委員会のもとにワーキンググループを設置して，以下の課題を遂行する必要があると考える．

(1) 継続教育の枠組みと評価方法についての検討

(2) 継続教育について地質学会が分担する課題の設定とプログラム案の作成

このワーキンググループの活動を踏まえて，委員長は他学協会との調整を諮る．

この課題は第1庶務委員会が担当し，ワーキンググループ委員の選出にも責任をもつこととする

上記の2件については，執行委員会において議論の上，了承された．本評議員会においてあらためて了承を得た．

**(2) 編集規約・投稿規定の改正（平成13年3月1日発効予定）について**

表記につき渡部編集委員長より平成13年3月1日発効予定で，現行の編集規約・投稿規定を現状に適合するように一部を改正したいとの提案があり，討論の上，原案の一部を修正し，また一部については表現に関する最終的な決定を執行委員会と編集委員会に一任することで，承認された．なお，この改正により，現行の臨時投稿規定は廃止される．（改正された編集規約・投稿規定は別途，地質学雑誌107巻1号に掲載される）

**(3) その他**

・「研究ハラストメント委員会」の設置提案について（本評議員会の執行委員会報告(8)，1）参照）

立石執行委員長より，7名の評議員の連名により追加議題として表記委員会設置案が提出された件につき，提案者と協議の結果，以下のように取り扱うことで了承が得られた旨，報告された．当該巡検案内書の筆頭執筆者が評議員会で謝罪を表明し，その内容を含めてニュース誌上に経緯と謝罪文を掲載することとし，その了解の上に立って追加議題を取り下げることとする．これを受け，巡検案内書の筆頭執筆者の高須　晃会員より関係者に対して迷惑をかけたことについて謝罪の意が口頭で表明された．その上で，今後具体的にどのような内容でニュース誌に掲載するか，執行委員会預かりとさせていただきたい旨，執行委員長より提案があった．討論の末，この扱いについて了承された．

## 執行委員会だより

### 2000年度　第13回執行委員会

日　時：2001年1月15日（月）14：00～18：30
場　所：地質学会事務局
出席者：立石執行委員長，公文・高橋・佐々木・足立・渡部・伊藤各執行委員　徳岡副会長　水野（事務局）

主な報告・議事は下記の通り

1. 2000年12月20日に開催されたJABEE第5回事務局長連絡会の内容が報告された．第11回基準・審査委員会（9/28）議事録（案）のなかで，「分野別基準案審議」の一部として，「資源および関連分野」に関して，「主要領域を応用地球科学，資源の開発と生産，資源循環と環境に大くくりしたと変更された」と記述されている．公表された議事録等についてはJABEEホームページ http://www.jabee.or.jp を参照されたい．審査委員の講習，養成や派遣など，学会としても財政的な負担が生じる可能性もあることが追加補足された．
2. 技術士再教育（継続教育）について　2月6日に応用地質学会，地下水学会，全地連などと協議会を開催し，継続プログラムの大枠や各学会の役割分担などを検討することとなっている．地質学会としての検討委員会メンバーとしてすでに公文（第1庶務委員長），徳岡副会長，高木（早稲田）・遠藤（日大）会員の承諾を得ているが，会社関係からの委員もお願いすることとし，籾倉会員に依頼することとした．
3. 第18期第1回地質研連議事録が田切同研連幹事から寄せられた．その中で，H14年度の科研費審査委員候補の推薦方法は基本は従来通りとするが，H15年度から大幅に変更される可能性が強く示唆されている．
4. 最近の地質学論集の売り上げ状況を執筆・編集グループ責任者に送付し，販売を促す．その上で，発刊後1年で元が取れなければ，買い取りの措置も具体的に検討していただく．
5. 第108年（金沢）総会・年会（9/29～10/1）の準備状況が報告された．第109年総会・年会開催校については引き続き依頼を進めることとした．
6. 地球惑星合同大会についてはレギュラーセッションなどのテーマ，コンビーナーなどが決まり，これから3/17を締め切りとした，講演申し込みの受付案内をニュース誌に掲載することとした．
7. 青木謙一郎学術会議会員より下記の連絡が寄せられた．科研費については同会員が担当すること，平成14年度は従来の方式を尊重するが，今後の在り方については検討すること，総合研連で検討の後，各学会に審査委員候補の推薦を依頼することなど．
8. 名誉会員推薦委員会の委員候補者について：申し合わせに従い，徳岡副会長を委員長とし，支部長ならびに院生を除く各階層からの委員，会員委員会委員長の構成で，至急立ち上げることが確認された．
9. 2000年度決算と会計監査日程について：決算は2月いっぱいかかる見通し，従って，3月上中旬には監査を行うスケジュールが確認された．
10. 2001年度予算について：大枠の方針は評議員会で承認されたが，決算の結果によって具体的な数値は動くことを了承．3月執行委員会で報告・確認することとした．
11. 7支部体制を確立するために，中部と四国の立ち上げに向け，関連する評議員の中で，責任者を決めるとともに，話し合いを具体的に進めることを依頼することとした．また，支部が学会全体の動向を知る上でも，評議員会への支部長オブザーバー参加を要請することとし，評議員会でも了承をいただけるよう提案することとした．支部長会議は副執行委員長が招集することになるので，金沢での総会以降に具体化することを確認した．

### 松江年会巡検案内書における辻森　樹会員を傷つける不適切な表現について

**日本地質学会執行委員会**

2000年10月12日，辻森　樹会員より，日本地質学会第107回学術大会の際の巡検案内書の中に同会員の名誉を傷つける記述が見られたので，執行委員会として調査し，その責任者に誌上で訂正と謝罪を行うよう求めていただきたい旨の要請文書が寄せられた．ここにその主たる内容とその後の経緯を報告する．

問題の巡検案内書：高須　晃・野坂俊夫・阪本志津枝・植村　眞，2000，大佐山・大野呂山周辺の高圧変成岩類と超苦鉄質複合岩体，および吉備高原の深部捕獲岩（B-10コース）．日本地質学会第107年学術大会（島根）　見学旅行案内書，147-160．

具体的な問題箇所：（執行委員会で要約，辻森会員からはほかに2点の引用文献の欠落の指摘）

1) 第2図の説明：辻森（1998）（地質学会奨励賞授与）から地質図と断面図を引用しながら，具体的な誤りの指摘や独自のデータを提示することなく，説明文でこれらの図を一方的に中傷している．
2) コスモクロアのプライオリティーについて：p.155のstop 4の記述において，「辻森（1998）には不適切な記述があり，その後，地質学雑誌に訂正文が掲載された」とされている．このプライオリティーの問題に関しては，地質学雑誌上に引用文献を追加・訂正したことによって決着済みのことである．にもかかわらず，あえて，この巡検案内書で辻森（1998）がプライオリティーを侵害したかに記述することは，辻森の名誉を傷つけるものである．

上記文書を受け，第9回・第10回執行委員会で対応を協議した．その結果，1）こうした学問上の論争は本来執筆者と当該者との間で解決をめざすべきものであり，2）論文はそこに名前を連ねた人の共同責任であることから，辻森会員に対し，直接，当該案内書執筆者に対し抗議されるよう，回答した．辻森会員からは共同執筆者の年齢や置かれた立場を考えれば，直接すべての執筆者に抗議の意を表明しかねる旨，連絡があった．

この件に関して，第3回評議員会（2000年12月9日）に向け，7評議員の連名で追加議題「研究ハラスメント委員会の設置」の提案があった．評議員会では当該巡検案内書の筆頭執筆者である高須　晃会員から謝罪が表明され，委員会の設置提案が取り下げられた（本誌掲載の第3回定例評議員会議事抄録を参照）．

執行委員会は当初この問題を学問的論争と判断し，そのために様々な混乱を引き起こした．ここにお詫び申し上げる．巡検案内書といった反論の機会の与えられないような形で一方的に非難することは研究者のモラルに関わる問題である．21世紀を迎え，地質学会が互いに競い合いながらも協力しあって新しい峰に向かって歩もうとしている今日であるからこそ，特に若手研究者の養成に際しては心していただくことを会員各位にお願いする．

最後に高須晃会員が評議員会で行った謝罪文を掲載する．

「松江年会巡検案内書において，若手研究者に配慮を欠いた不適切な記述を行い，当該会員，ならびに関係各位にご迷惑をおかけしたことを謝罪します．　2000年12月9日　高須　晃」

研究室のミニ工場

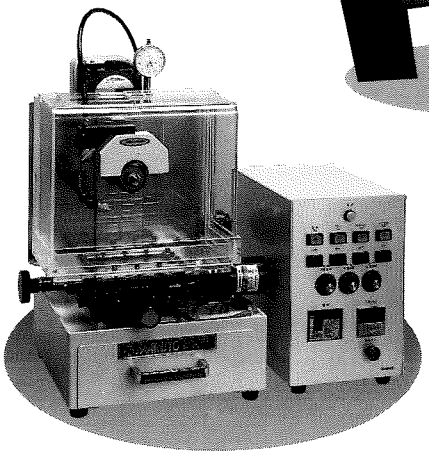
# マルトー®のラボ・ファクトリープラン3点セット

分析・検査用試料作製機器
〈切断・研削・研磨〉

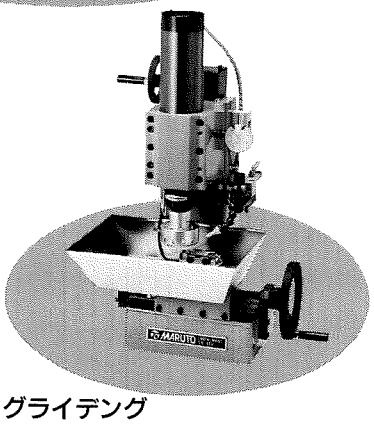
小さな機械(なり)だが役に立つ

小型 精密 操作簡単 低価格

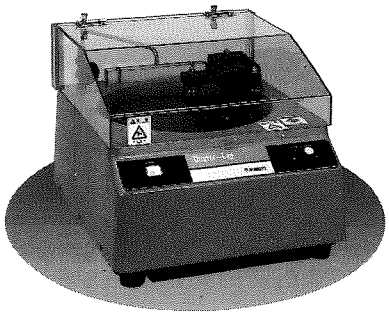
3機種揃えば、各種試料の精密加工が可能です。
(ガラス・水晶・シリコン・セラミックス・鉱物・金属材料などの加工)



カッティング
連続・浅切込みができる
## ステップカッター
〔MC-170〕
- 試料へのダメージが少ない
- 最小切込み量 10μm／pass
- 最大加工能力 H25×L40mm
- 設置面積 W550×L450mm
- 本体価格 178万円～



グライデング
立軸平面研削機
## プレパラップ
〔MG-300〕
- 最小切込量は、0.01mm目盛
- 加工サイズは、MAXφ50mm
- 任意研削面の逐次観察が可能
- 研削・研磨、同一治具使用により、研削・研磨工程は簡単で高精度
- 設置面積 W560×L380×H640mm
- 本体価格 98万円～



ポリッシング
精密鏡面研磨機
## ドクターラップ
〔ML-180〕
- 組織検査用試料のラッピング・ポリシング
- アクセサリー豊富
- 研磨試料サイズ φ1～φ100mm
- 設置面積 W400×L400mm
- 本体価格 45万円～

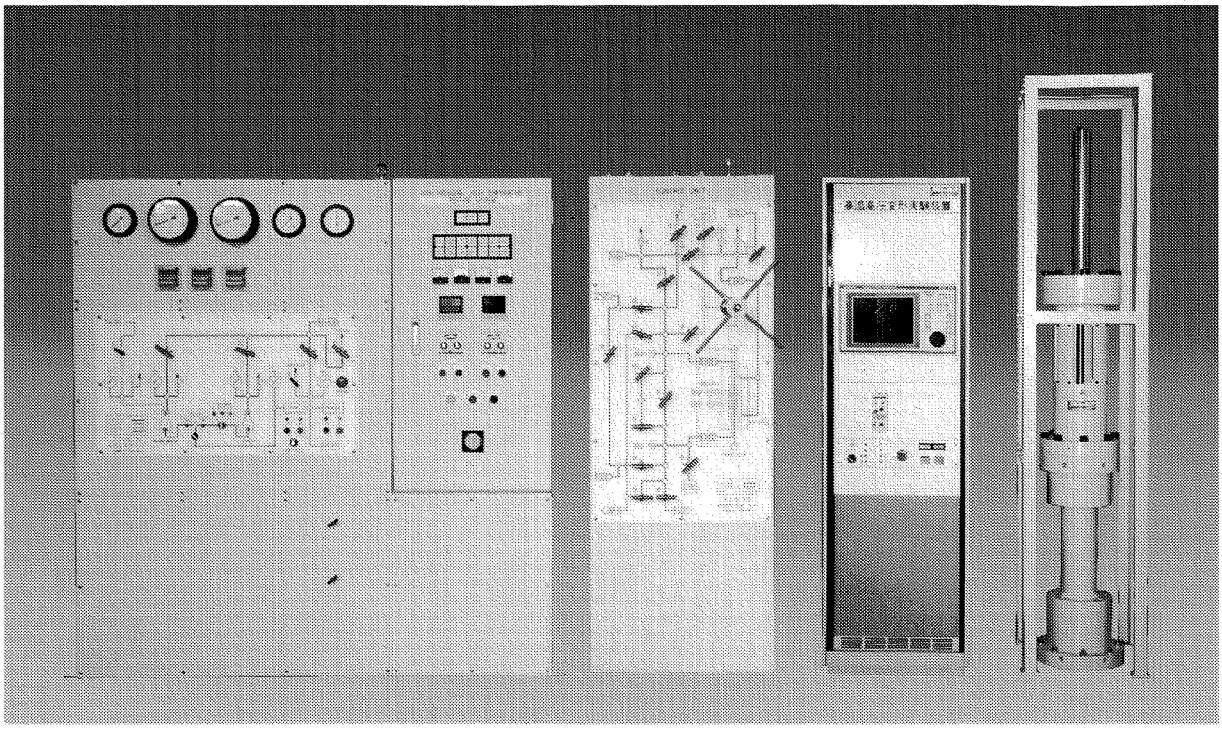
☆貴重な試料を無駄なく手軽に加工したい、各種カタログあります。開放実験室でテスト加工が可能です。

材料を切る・削る・磨くそして測る技術で奉仕する

株式会社マルトー®
E-mail: maruto@maruto.com http://www.maruto.com
本　社／〒113-0034 東京都文京区湯島1-1-10
☎東京(03)3251-0727(代表) FAX: 東京(03)3251-2478
福岡連絡事務所／〒815-0033 福岡市南区大橋1-21-5 岩田ビル
☎福岡(092)512-2755 FAX: 福岡(092)561-4288

DYNAMIC SERVO
SAGInoMIYA

地下6kmの高温・高圧・熱水条件を再現し、
岩石の三軸変形試験及び透水試験を行います。



# 高温高圧変形実験装置

- ガス圧式のため容易に高温が得られます。
- アルゴンガスを用いておりますので、岩石試料等に腐食などの悪影響がありません。
- 内部加熱炉を用いておりますので、岩石試料付近を局所的に加熱することができ高温でも安全に実験をおこなえます。
- 間隙圧媒体としてガスと液体（水）を用いることができます。
- 付属品に試料セットアップ治具、試料用ジャケットが用意されております。
- 既設の岩石圧縮試験機に取り付けて使用できます。

SAGInoMIYA

お問い合せ・ご用命は
**試験機営業部**
東京都中野区若宮２－55－5　〒165-8907
TEL 03(3330)1130
FAX 03(3338)4990
E-mail: dynamic-servo@saginomiya.co.jp
URL: http://www.saginomiya.co.jp

株式会社 鷺宮製作所
本　　社／東京都中野区若宮２－55－5　〒165-8907
大阪支店／大阪府吹田市広芝町18－12　〒564-0052
TEL 06(6385)8011(代) FAX 06(6384)0859
福岡営業所／福岡市博多区博多駅前1－7－22 第14岡部ビル　〒812-0011
TEL 092(436)6001(代) FAX 092(436)6002